女鑑

明治廿六年十一月廿四日發行

第五十一號

東京國光社

女鑑第五十一號目次

菊池武時の夫人



女鑑

中年の婦人宜しく地理學を學ぶべし

我が邦、中年の婦人にして、最欠乏せるは、蓋、地理學の思想ならん。彼の婦人等は、維新の前後に生まれ、假令、士人の家に人となり、多少の讀書を學べるものと雖、其の勤むるところは、和漢文の類にして、道德の敎と、文學に關するものとを除く外、知る所なきもの多し。然れども、世の進み行くに從ひ、珍奇なる出來事、紛措せる見聞の重なるにより、自然に、彼の婦人等をして、この新時代に追ひ付かんとする念慮を發せしむるも、制度、文物は、もとよりいはず、其の及ぶところの區域は、いたく異なりて、舊時、一藩以外の地名さへ知

らざりしに、一奇事を耳にするも、其の土地は、聞き慣れざるところなれば、假令、其の事柄を耳にするも、其の皮相にとゞまりて、十分に、其の事柄の眞相を推想すること能はざるなり。かゝれば、兒童教育の上にも、いたく、其の弊を及ぼし、兒童が、學校にて、日本地理、萬國地理等を學ぶも、眞に會得する力、甚弱く、隨ひて、愛國の精神は勿論、冒嶮起業の志をも發起することなく、依然たる封建の人物たらしむるに至るものあり。

抑、其の國を愛するといふことは、先、其の國を知るに在りて、其の國を知らずは、以て、之を愛する念慮を起こさしむるに由なきなり。其の國を知るといふは、即、其の國の歴史と、其の國の地理とを知るに在り。其の國の歴史、其の國の地理を知るは、單に、其の美なるところ、其の長ずるところを知るのみ

ならず、又、其の短なるところ、其の粗なるところを知るに在り。譬へば、我が邦は、四面、皆、海なれば、水産の利、世界各國に比類なき美所、長所を知ると共に、又、之を守ることの至難なる短所をも知らしめ、奮ひて、之を防護せんとの義膽を養はしめざるべからざるなり。又、一地方に在りていふも、山の國は、山の利あると共に、道路の嶮難、交通の不便などいへる不利あり。河の國は、交通運輸の便あると共に、洪水氾濫の害ありといふが如く、兒童の心地に、地理學的の思想を種ゑ、其の利害を計較する心を長ぜしめずば、以て、有爲の氣を發せしむるに足らざるなり。而して、是等は、學校教育の勤むべきところなると共に、又、實に、家庭教育の根底あるにあらずは不可なり。而して、今の中年の婦人たるもの、最、地理學の思想、智識少なきは、これ、大に、後

の少年を害する所以にして、國の進歩を遮ぎること大なり。吾人は、何等かの方法を設け、婦女子をして、地理學を學はしむることの急を唱へずはあらざるなり。

論說

女教師に就いて

岩下方平

およそ、女子を以て、教師たらしむべきは、裁縫、音樂、其の他、便宜なる手藝を以てせしむるこそ適當なれ。學科を以て、普通の教員たらしむることを欲せさるなり。もし、女子をして、教師たらしめは、學科程度の、最簡易、且、下級なるものを擇びて教へしむべし。必、高等なる學科程度の教師たらしむべか

らず。其の任に當るに足るべき自然の技倆と、學術とを備ふるもの稀なるを以てなり。そもく、女子の性たる、普通の感情に於いては、きはめて、敏捷に、且、綿密なること、遙に、男子に越えたれども、其の理想の念にいたりては、彼の感情の敏捷なるにひきかへ、其の鈍にして、男子におよばざること、甚遠し。其の事實、誠に、男女の學校につきて、男生と、女生との如何を察し見よ。女子が、詩歌文章、又は、歴史の人名、事蹟、および、地理に於ける山岳の高さ、川流の長さ、原野、沙漠の廣さなどの如きを、やゝ、無心に記臆することは、頗、男子に優れりといへども、尚、進みて、其の詩歌文章を含味して、其の意義を解し、歴史を讀みて、其の事蹟の由來する所を推想するが如きは、略能はざるものなり。故に、理化學、數學などの、尤、理想を要する學科にいた

りては、これを會得する知覺に乏しきこと、男子に比して、數等の劣差を見ることと著しかるべし。是に於いてか、女子に、高尚なる學科を修めしむること、はた、無益の勞に苦しましむるに過ぎざるを知る。即、これ、女子に、高等なる學科の教師たらしむること能はざる所以なり。又、たま〳〵に、學科の教師たることを得るものも、生徒を管理するにいたりて、憾なきこと能はさるなり。曰はく、感觸の周密なる女子の特性を以て、着々、生徒の弱點を見出だし、且、生徒に、牽制を施すこと、頗、嚴刻なるおもむきを覺ゆ。故に、十歳以上の、やや、知覺のすゝみたる兒童にいたりては、これを厭へる傾ありて、おのづから、親しみ來らず。又、体度の、天賦柔軟にして、威風に乏しきを以て、生徒を率ゐ服せしむるに宜しからず。音聲高く鮮かなりといへども、教場に臨み、講義

說明などする時は、軟々として、言語の斷續、男子の如く快ならざる所あり。即、これ女子が、高等なる程度に、教師たること能はざる所以なり。嘗て、女子高等師範學校を廢すべしと云ふ議ありしが、其の意、蓋、亦、これによるもの多きか。然れども、幼稚園は、女子に任ずるに如かざること勿論、尋常小學科の女生徒、および、二年級以下の生徒を教育せしむること、女子に委ねて可なり。女子の、注意周到にして、兒童を撫育する、粗、家庭の如きおもむきを以てする、猶、男子のおよぶこと能はざる所なり。蓋、家庭をつかさどること、女子の本分特性なればこそ。この論、後進の女子をして、甚、失意の域に淪ましむる嘆ありと雖、實際の勢、また强ひること能はず。恨むること勿れ。

女子要言　第二篇（廿三）

三輪田眞佐子

此より、婢僕を使役する方法に就き、其の大概を述べん。抑、女子は、主として、直接に、婢僕に接するものなれば、如何に、之を使役すべきかを知らざるべからず。乃、其の使役の方法如何は、一家の幸福、及、利益に、大なる關係あるものなり。豈、忽にすべけんや。

第一　寛容すべし。概して、人の婢僕たるものは、無敎育のものにして、其の生活の目的たるや、飮食、衣服、及、遊逸を得るにあり。而して、固より、智量乏しく、識見卑ければ、爲すこと、行ふこと、家主の滿足を得る能はず。否、執性怠惰、忘却、貪慾、虚言、多言、離間、及、盜心等の癖ありと雖、恒に、君子を以て、之を責むるは、反りて、主人の、未、人事を知らざるものと言はざるを

得ず。通例、其の行宜しからざるものならば、先、好言、以て、之を戒諭すべし。多く恕して、而して、尚、命を用ゐざるものは、解雇する外なし。貝原益軒曰はく、恭にして和なるは、友に交はる道なり。嚴にして寛なるは、下に接する道なり。恭、且、嚴なれば、己を失はず。和、且、寛なれば、人を失はずと。實に、婢僕を御するには、寛に過ぐれば、馴れて、而して、使ひ難し。嚴に過ぐれば、容のみ服して、心は、之に背くなり。思ふに、天は、人の上に、人を作らず。人の下に。人を作らずと雖、彼等は、財貨なきが爲、教育なきが爲、單に、主人と、位置を異にするのみ。故に、彼も、我も、等しき天稟の人なれば、決して、牛羊視して、殘忍に使役すべからず。況、徳、草木禽獸にさへ及ぶは、女子の本分なるに於いてをや。

第二　自、範例を垂るべし。馬を引きて、河を渡らんと欲せば、己、先、衣を掲げて、水を犯さゞるべからず。婢僕をして、家業を勉強せしめんと欲せば、己先、夙に起き、夜に寢ね、心を焦し、身を勞して、好摸範を示さゞるべからず。若、己、單衣の裁方さへ知らずして、下婢に、羽織を縫へと命じ、而して、婢より、其の不審の點を質さるれば、獨、心に耻づるにや、意氣憤然とし、己、漬物の仕方抔をも知らずして、下婢を呼び、菜漬に、酸味あるを叱り、忽、下婢より、然らば、如何せば可なりやと尋ねられて、默々たる如きは、往々、吾等の今日、見聞する實例なり。是、焉ぞ、婢僕を御する道ならんや。然らば、中流以上の女子は、幼時より、婢僕の行ふべき業務の大要を心得て、一朝、一家の內君となり、婢僕を指揮するに當り、周章狼狽せざらんことを要す。

第三　勵ますゝ、賞を以てすべし。這は、婢僕を御する秘傳なり。蓋、義ゝ勇み、功を樂しむは、人の情なり。之ゝ反し、報賞なきゝ、孜々として働き、成績顯れさるゝ、汲々として勉むるものあるは、聖人の亞流なり。何ぞ、婢僕の能くする所ならんや。婢僕を使ふは、叱らんより、寧賞むべし。叱るときは、自暴の心を生じ、身を、法外ゝ放つゝ至ればなり。賞むるときは、敢爲の氣を起こし、身を、主家ゝ任ずるゝ至るものなり。茲ゝ、賞といふも、格別のことゝあらず、唯、勉勵するときは、能く、其の勞を認め、後、祝節、祭日等の機會ゝ、些少の物を與へ、非常の苦勞をなすときは、好食ゝ飽かしむる抔、彼等を、能く、愛すれば足れり。唯、彼等は、求めて、而して、飽くを知らざるものなれば、其の心してよ。但、以上の方法は、一般の出入者までゝも通ずるものなり。

茲に、婢僕採用に就き、附言せん。何れの家も、婢僕の善きもののなきを歎かざるはなしと雖、能く、之を撰らび、而して、徐々に、之を敎へば、善きもの少なからず。而して、其の悪しきものを使ひ、孩提の童を、之に委ねば、自然、其の子の習性を害せん。或は、婢僕の常習より、一家主人の不吉起ること少なからず。清少納言が、從者に就いて云ふ樣、門ぢかな所をわたるを、よびいるゝに、あいきやうなく、いらへもせで、いくものは、つかうらん人こそ、おしはからるれど。實に、當然の推測なるかな。之に反して、善きものをつかへば、一家の慶事なり、見よ。一家、擧りて、傳染病等の災に罹る時、忠愛なる婢僕の爲に救はれ、聞くものさへ、猶、感涙に堪へざる奇特の例少なからざるを。昔、會稽の翟素といふ女子、聘して、未嫁せざる時、賊ありて、力を以て、之に迫り、敢て犯さんとし

たりけるが、忽、其の婢、跪き、泣いて云ひけらく、妾、請ふ、之に代はらんと。遂に、主從共に殺されたりけるを。當時の君子、一は貞なり。一は忠なりと評したりとかや。願はくは、斯かる婢僕を撰らばんことを。古語に曰はく、君子、道を學べば、人を愛し、小人、道を學べば、使ひ易しと。實に、教育は、上下を通じて缺くべからざるものなるかな。

史談

菊池武時の夫人

馬醉木滋野

人心に忠孝を廢し、大義地におちて、亂賊相踵ぎ、日月は天にかゝれど、世は暗夜を行く如くなりし、彼の元弘の時にあたり、筑紫の中央に卓立し、大義の光輝を發揚して、世の暗黒を照せしものは、菊池の一族なり、この至難の間に處して、斯の

如く、大義の光を大にし、勤王の聲を高うして、始終一貫、一人の節を折るものなかりしは何ぞや、寂阿入道武時が、節に殉するにおよび、其の妻、同穴を誓ひ、自盡して、其の子、武重以下を勵まし、國讐を滅ぼさむとする念を、堅めたるに因るもの多し、曰く、　後醍醐天皇の、隱岐の島より、伯耆の船上山に幸し給ふにあたり、勤王の士、やゝ諸國におこれり、この時、元弘三年、肥後守菊池武時、少貳貞經、大友貞宗等と、官軍につきまつらむことを謀り、密に、行在所に奏しければ、天皇、嘉賞し給ひて、錦の御旗を賜はり、其の義を勵まし給へり、鎮西探題北條英時は、筑前の博多にあり、この事を洩れきゝて、武時を博多に召す、武時は事の洩れしを覺り、直に、少貳大友に告げて、敵より先に、攻めかゝりなむとしけるに、兩人は、京都の戰に、官軍のしば〳〵利を失ふときゝ、武時に應せず、貞經は、遂に、武時の使者を斬りて、首を英時に送れり、武時大に悔い、怒りて曰く、豎子の爲に過たる、今さらに如何はせむ、よしや彼等が手を假らじとて、軍はなるまじきかと、家兵百五十人を率ゐて、博多におし寄せ、英時を攻む、兵みな、死を輕むじて戰ひければ、英時やがて危うかりしに、少貳大友、大兵を率ゐ來て、後まきしたり、武時

かつべからざるを斗り、兵五十を分ちて、子の武重につけ、誡めて曰く、我、今、義におもむき、命をおとす、素より、我が分とする所なり、汝、急ぎ故郷にかへり、城を完うし、兵を聚め、時を得て、國の讐と、父の讐とを報いよと、武重、固く請ひ、共に死なむとす、武時、汝をかへすは、私の愛にあらず、國家の御爲なりと、くれぐれ誡めければ、武重、涙をふるひて去る、武時、死に臨み、

　故郷に今宵ばかりの命とも知らでや人の我をまつらむ

と詠みて、妻の方へおくり、餘兵を督し、英時が陣にせめ入りて、うち死す、武時の妻、この歌を見て、曰く、武士たるもの、家を出づるより、かゝる事あるまじきにあらずとて、武重をよび近づけ、やよ武重、汝、かならず、父の誡を守り、時をまち、隙をうかゞひ、要害をかまへて、大義を唱へ、大功をたてよ、今は、入道殿の待ち給はむにとて、

　故郷も今宵ばかりの命ぞと知りてや君が我をまつらむ

と詠みて、自盡しけり、武重は、父母の遺誡をまもり、勤王の大功をたつ、天皇、京都にかへらせ給ひ、諸臣の功を錄し給ふ、楠正成、奏して、菊池氏を、功臣の第一

とすべしと申す、天皇、きこしめし給ひき、

角屋助三郎が妻まさ女　古里をの子

おひ〳〵、夜のながうなれば、孫女らと、爐をかこみて、榾さしくべつゝ、夜ごとのやうに、何くれと話しきこえさするに、もとより、世のまじらひのせむき妾、はじめの程こそ、話のたねもありたれ、のちには、きこえさすべき事柄につきぬれど、孫女らの、なほも、乞ひてやまざれば、いと困じはてゝ、ものゝ本など、くりひろげつるに、角屋助三郎ぬしの妻まさ女ぬしのことを見つけいだしぬ、これ、よきたねなりと、直に話しきこえさせつ、そして、その事柄の、あまりにめでたけれど、書きつけて、貴社にものしつ、幸にして、餘の紙をかしたまはらむ、老がよろこび、何にかたとへん、あなかしこ、

長門國豊浦郡清末の鞍馬町に、角屋助三郎と云者あり、その女まさ、幼て父にはなれ、母ひとりに育されたりしに、いまだ物の辨もなき程より、母に事へて、聊もその意に背きし事なかりしかば、自ら聞えて、藩主よりも、幼き女にめづらしき事と

て、物給はりなどしけり、成長て後、聟を迎へけり、これもその名を、助三郎と改めて、親の跡を續ぎ、家業に怠らで、坊の長をも勤め、夫婦むつまじく暮しけるが、老母六十ばかりの頃より、ふと病床に打臥しけるに、さらでだに、孝心深き者どもなれば、朝夕母の側を離れず、藥餌のあつかひにのみかゝりて、家内の食物をぞ、母の眠れるほどに調へ、目さむれど、やがて背をなで腰を摩りつゝ、或はよもやまの物語に、欝をはらさしめ、或は僧を招きて、談義に徒然を慰めなどして、心を盡し介抱しけるほどに、母も病苦をわすれて、七十餘までもながらへ、なくなりにけり、まさが歎、おほかたならず、あけくれ牌前に向ひ、生ける時の如く、物いひ、また折折は、母の遺髪を取出し、撫みさすりみして、正しく母に逢へるが如き狀をしつゝ、歡びもし悲しみもしけれど、助三郎も、その現なき樣なる、まさが意を思ひやりて、知り顔せど、中々に耻もやせんと、見ぬふりしてぞ打過ける、然るに助三郎、母の病に罹りし頃より、あだし心のいできて、折々、ある女のもとに通ひけるを、いつしか政もしりたる樣には見ゆる物から、嫉妬がまし言をもいはず、その女、はた助三郎が家近き者なれど、をり／＼には出入もするを、來たる時も、まさ、日頃にかはり

し面色もせず、いつとても親しくかたらふを、助三郎、いぶかしく思ひて問ければ、まさ、わが身は弱き者にて、かつ愚なれど、常々、君の心にもかなはざらんを、彼女の、なれ〲しうし侍るは、いと嬉しき事とこころおもひ侍れ、いかでかねたましきさまなどを見え侍るべき、かゝりけりと心づきし後は、いよ〲彼女に、うちとけて親しくし侍るなり、と答へければ、助三郎も、わが愛する女を憎まずして、自らの行ひをぞ、すこしも變へざる貞節に耻て、その後、その女のもとには通はずなりにけり、かゝりける程に、助三郎、いつとなく、本心をとり喪ひて、物狂はしきさまになり、晝夜のわかちなく、町内をかけめぐり、人にあひては打かゝり、疵つけなどせしかば、そのまゝにさしおき難くて、兄弟の者どもかたらひ合せ、板圍のうちに籠にけり、まさ、痛くうきことに思ひて、せめては衣服飲食なりとも、歡ぶ品を與へまほしくて、何くれと心を用ゐ、懇に介抱しけれども、衣類夜具などをも、あるかぎり引裂き、圍に入りしよりは、殊更に、食物の度を過しければ、左様にては宜しからぬよしいひて、ほど〲に與ふれど、甚く怒りて、飯汁にまれ、湯茶にまれ、まさが顔にうちつけ、狂ひ叫びていかんともせんすべなければ、まさ、更に疎にとり

あつかはず、兎角にいひ宥め、また若、物とふ事ある時も、狂人とて等閑の看をなさず、具にその事をいひ聞せ、知らぬ事なれど、他人よ尋ねて、詳に諭し、尋常の時の如く事へけり、その貞順の行ひ、筆紙に盡し難し、助三郎がかくなりしよりは、夜陰など、おぼつかなき事もころわれとて、兄弟の者ども、かはるぐ〵心添として、來りやどりけるに、或時、まさが、圍の側に、獨臥したるを見るに、いと寒き夜に、薄き衾を一重かけて、敷ける茵もなし、不審しくて、その翌朝、是をとふに、何へれど云ひ紛らして、其由を語らず、又の夜も心をつけて窺ふに、猶しかりければ、夜具もたらぬほどの、貧家にもあらぬを、何故にかくはするぞと、強て尋ねければ、病のわざとは云ながら、夫のかく板圍のうちに、苦しかる有樣を見て、妻たる者、いかでか衾を重ね、茵をしき、暖に眠られ侍るべき、故に、わざとかくはし侍るなり、と答へけりとかや、此一件にても、萬事おしはかり知られたり、本邑の坂本敎倫が

冬の夜を薄きふすまに寢もやらでうきを身にこそかさね着つらめ

とよみてつかはしけるは、此事なるべし、その後、三年ばかり過て、まさが看病の誠を、神も憐み給ひけん、かゝる心經の病は、もとに復し難きものなるを、おのづ

から平癒したりけれど、夫婦の中に、子無かりしゆゑ、助三郎が末弟を養ひて、妻を迎へさせ、家内いよ〳〵睦じく暮しけり、まさ、さる商家の女ながら、風雅の心もありて、仲秋の望夜、月の前に亡母のこと思出て、

名月や母かと見ればおのがかげ

といふ俳諧の發句を、くちすさびたりとぞ、母を慕ふの眞情、言外にあふれて、いとあはれに聞ゆ、

家政

看護法捷徑（二十八）

三笠舎主人

第三編　救急法（つゞき）

（九）止血法

一創傷は大抵出血を伴ふものにて、出血の多寡は、直に生命に關す、故に看護者は、豫め出血を止るの方法を熟知し置く事、第一の要件とす、特に戰塲等においては、

直に之を行ふて、傷者の危急を救はざるべからず、

二出血に三種あり、創の全面より血液平等に流出するものは、小なる血管より出るものにて、毛細管出血と云、血液暗赤色にして、稍線狀を爲し、緩急なく創口より流出し、試に創の上部（體の中心に近き方）を壓迫する時は、流出の勢增し、下部（體の中心より遠き方）を壓すれバ止むものは、靜脈出血なり、鮮紅色の血液、線狀を爲して噴射し、緩急ありて脈搏の狀を爲し、創の上部を壓すれば、射勢減退、或は全く止み、下部を壓するも、毫も影響なきものを、動脈出血とす、

三出血は右の三種に依りて、性狀異なるものなれバ、三種の內、何れの血管より出血するものなるやを、豫め知る事肝要也、

四毛細管出血は、冷水にて洗ふか、又は創を壓するか、若くは自然に止むものにて、日常の小創に多く見る處なり、

五靜脈出血も、多くは毛細管出血と同法に依り、若くは自ら止むものなれども、若し大なる靜脈傷くか、若しくは創の上部、衣服、帶、等の爲に緊迫せらるゝ時は、止血せずして終に危險に陷る事有、故に此の出血を止るには、速に衣帶を解き、創

處を高く擧げて、安靜に保ち、繃帶又は布片等にて創口を壓迫すべし、若し猶止血せざる時は、卷軸繃帶を用ゐて、傷肢の末端より創所に至るまで、全く纏絡すべし、

六動脉出血は、容易に止血せず、特に少しく大なる脉管より出るものは、動脉結紮法と名付る、手術を施すに非ざれば、決して止血するものに非ず、生命上最も危險のもの也、速に醫家に託り、又は其診を乞ふべし、尤醫の處置を待ずして、出血の爲め死に陷るを防がん爲、一時の姑息止血法を行ふ事、亦最も肝要とす、之に由て、死をも救ふを得るもの也、

七動脉止血法中、最も單簡なるは、指頭にて出血する部を直に壓するなり、此法良なれども、久しきに堪へず、且患者を運搬する等の時は、固より不便也、次は、手巾又は厭巾等を厚く疊みて、創口に塡め、手巾又は卷帶を以て、其上を固く縛して強く壓迫すべし、此等の法を行ふも猶止血せざる時は、創所の上部に於て、傷きたる動脉の幹を壓すべし、

八動脉幹の壓迫を行ふにも、手を用ゐるを良とすれ共、亦久しきに堪へざれど、止

血器と名付る一種の器械、（固より姑息のもの、）又は何にても堅實のものを取り、（恰好の石を手巾等に包むも可也、）動脉の經路に當て、其上より手巾、卷帶、等にて固く纏括すべし、

九動脉幹の壓迫を行ふには、豫め人身搆造の大略に通じ、動脉の經路を熟知するを要す、通常、手、腕、に分布する動脉の出血には、上膊中央の內側を壓し、足、脛、の動脉出血には、鼠蹊の中央にして稍其下部を壓し、又頭及顏の動脉出血は、喉頭の兩側を強く脊骨に向て壓迫すべし、（頭首顏面に循る動脉の本幹、此所を經過す、）

十此等の動脉止血法は、二三時間持久するも、害なしと雖、元來外壓の力にて、強て一部の血行を廢絕せしむるものなれば、更に長時に及ぶ時は、血行廢絕したる部、脫疽に陷るの恐あり、且固より一時姑息の救急法に過ざるが故に、必ず速に醫の治術を乞ふべし、

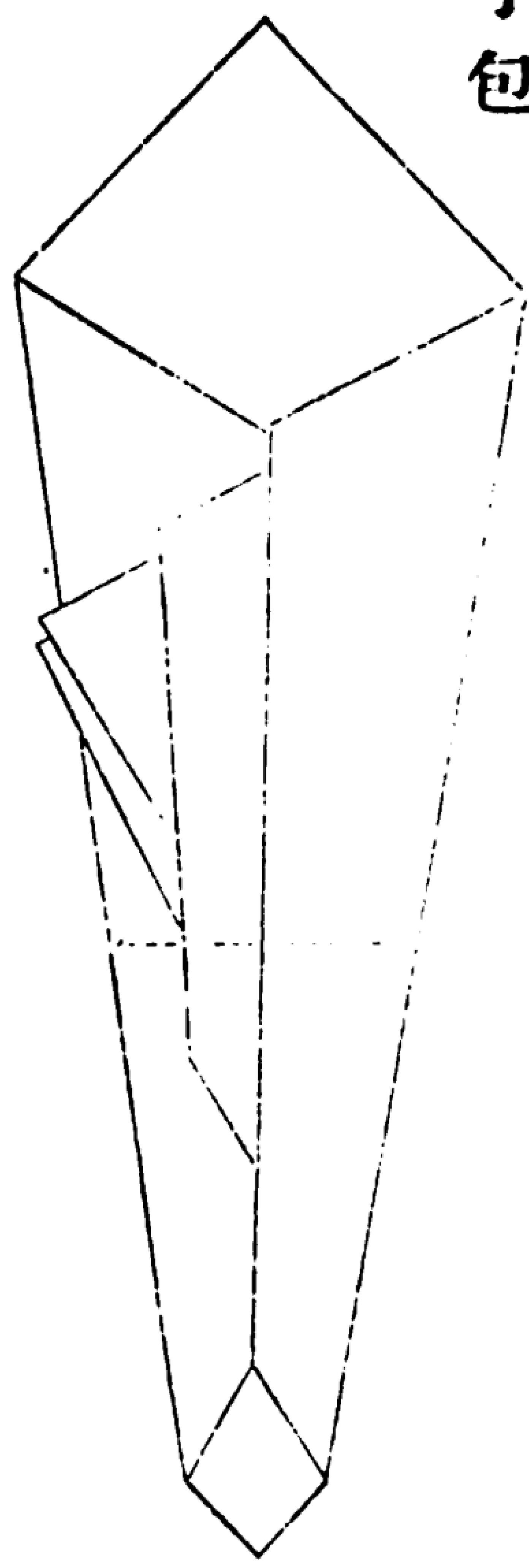
折形（四）

有住齊

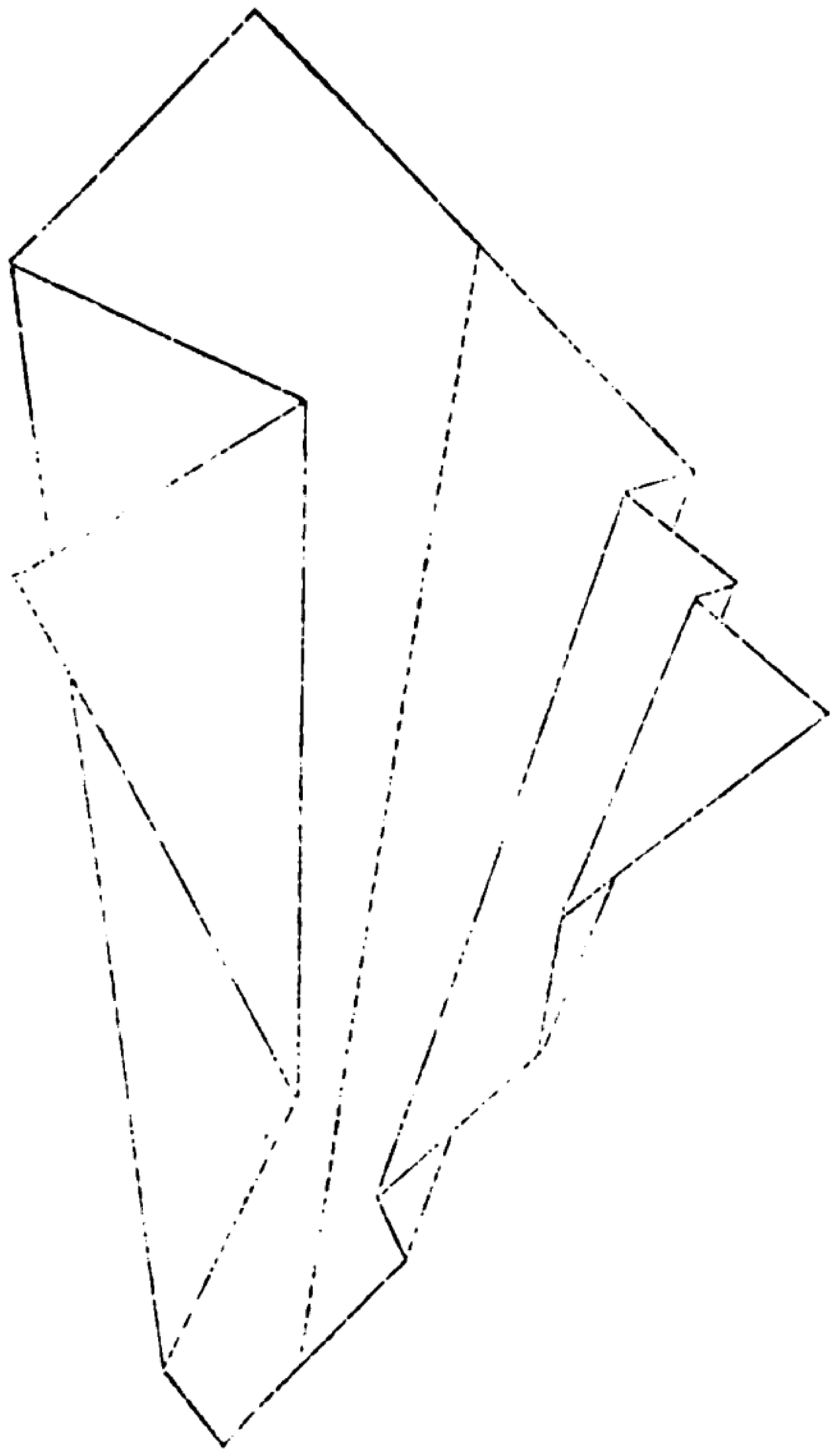
一扇子包

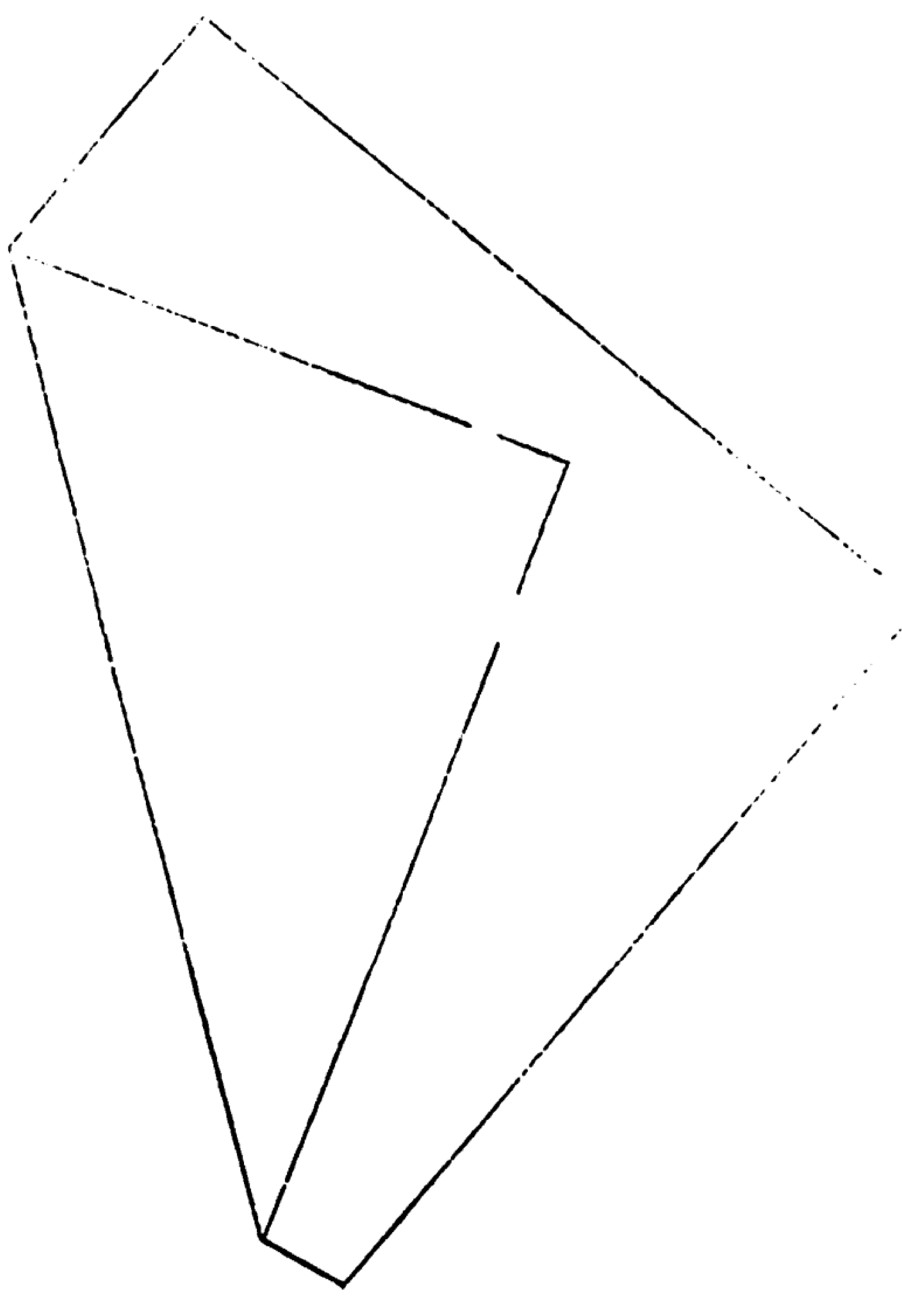
二本にても、三本にても包む也、先、下結をして包む、下の方に、水引を掛ける、本式は、穴を明けて通すべし。なれども、外より回して留るもよし、

扇子包



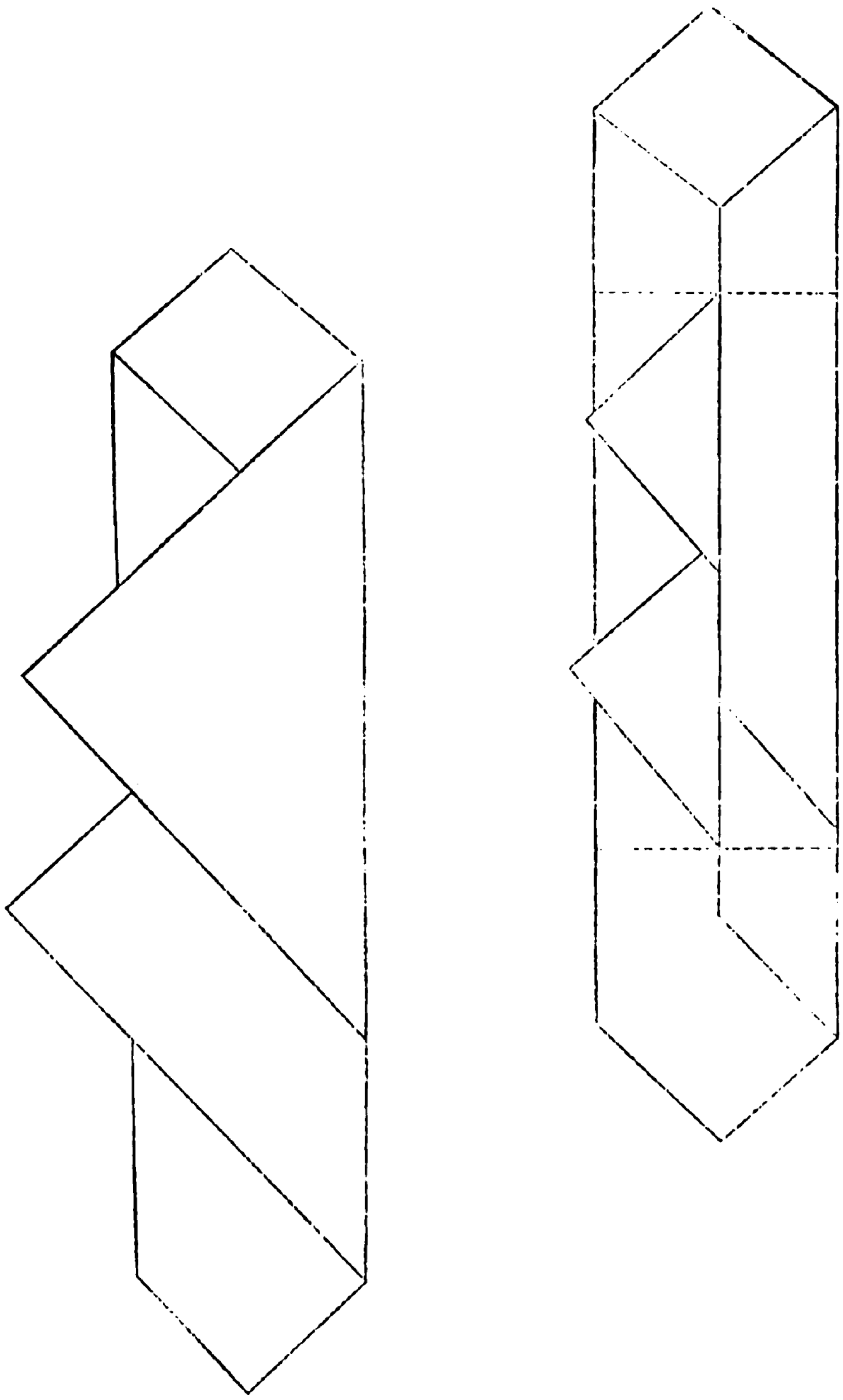
解



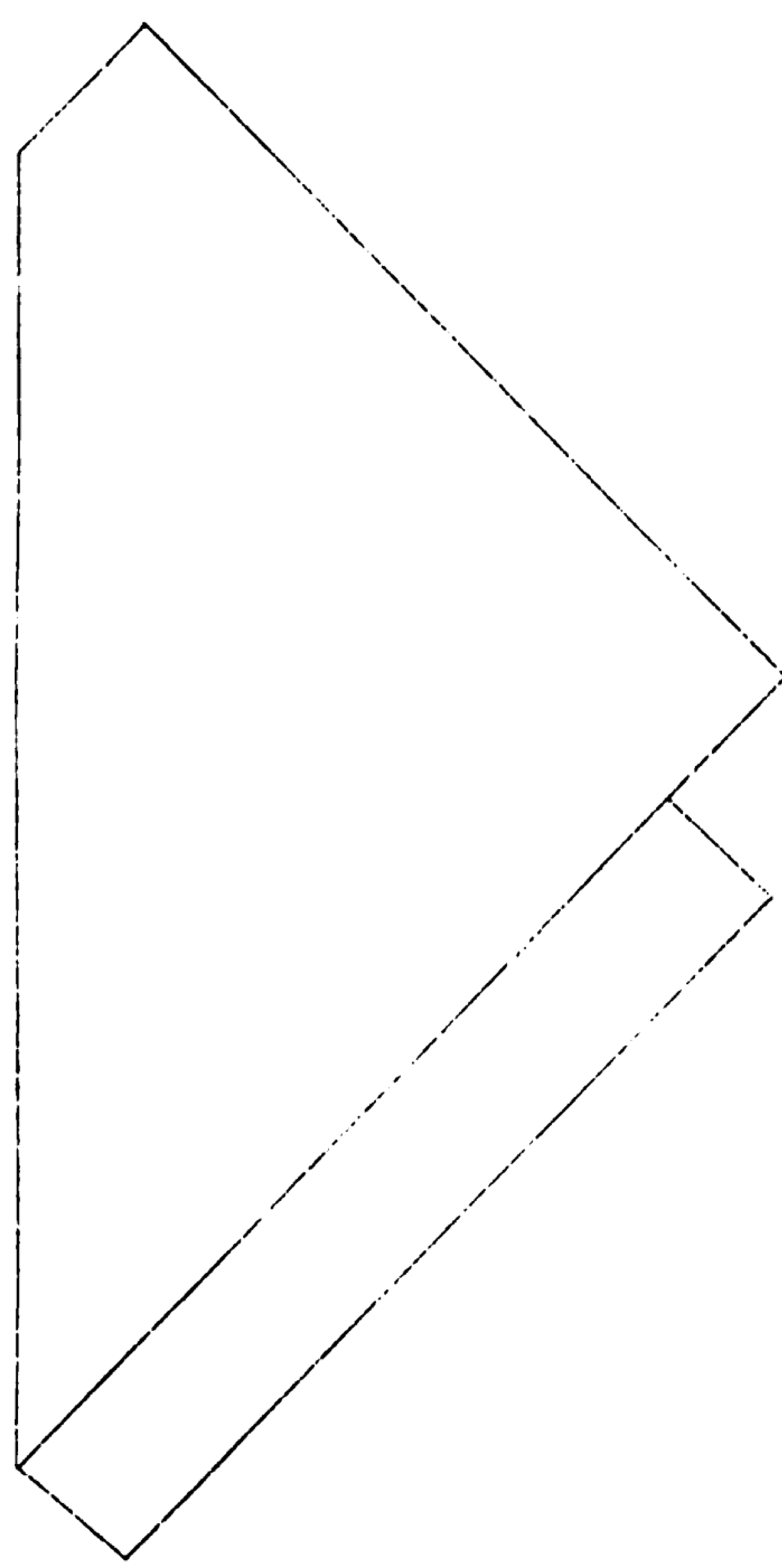


一 黄金包

後世は不包、臺の下水板を、採拔て、裸金にて、遣はす事となりたり、



黄金包

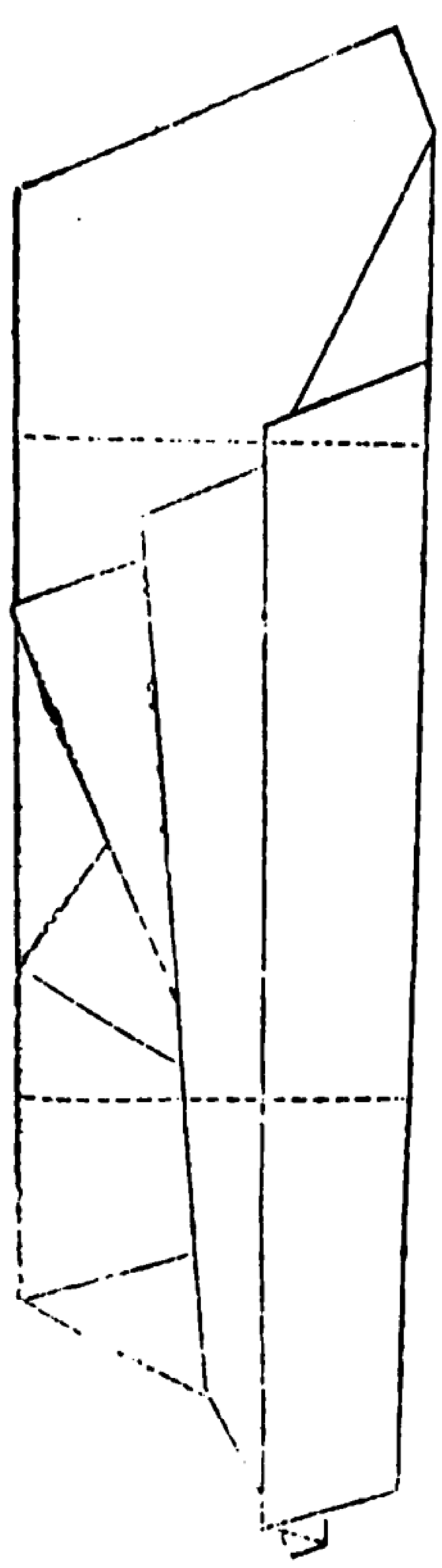


一猪子餅包

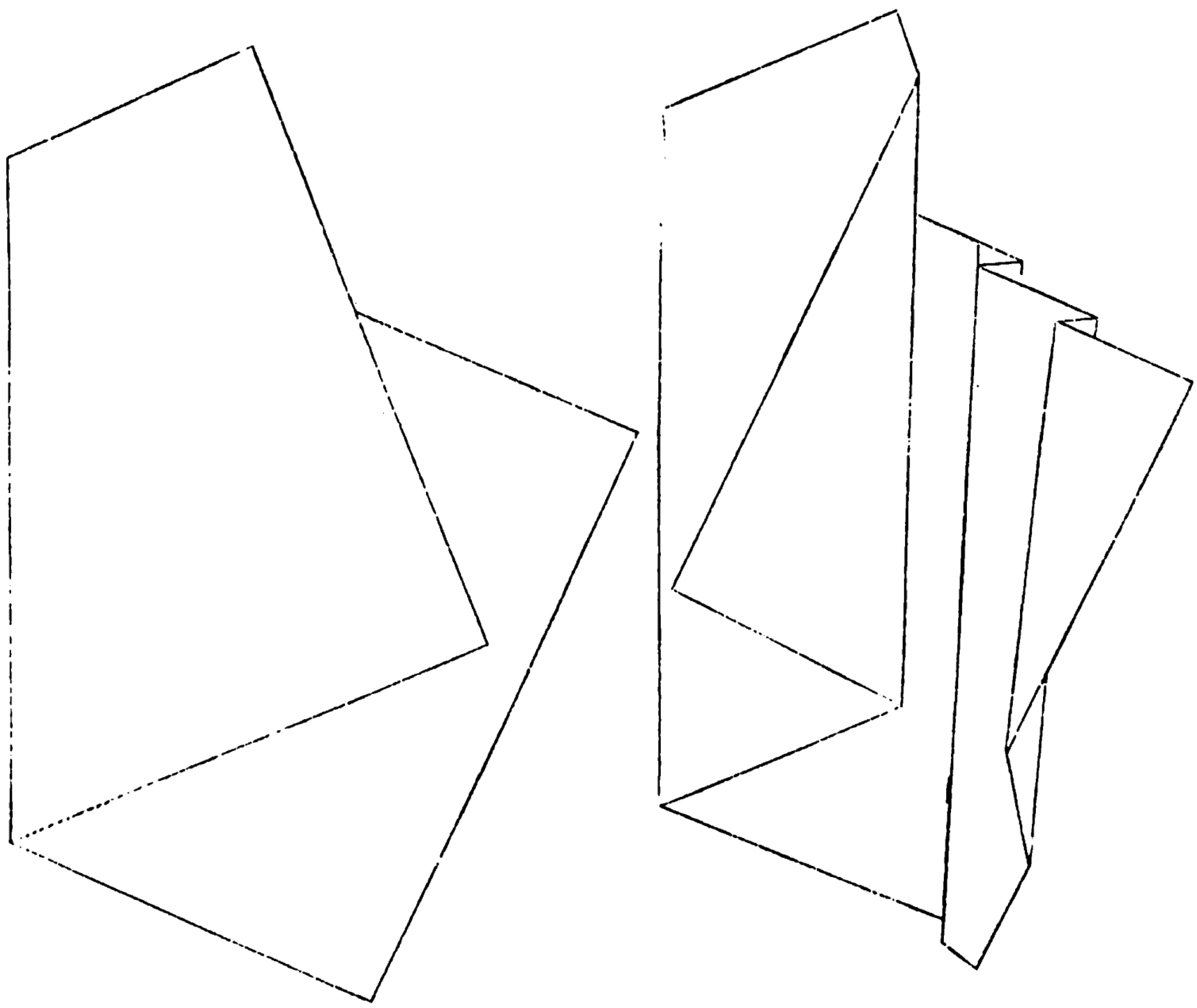
貴人より、手づから賜はるものなれども、其日出仕なき者へ、包て賜はる事也、

水引かけず、又掛たるも有也、書付なし、

猪子餅包



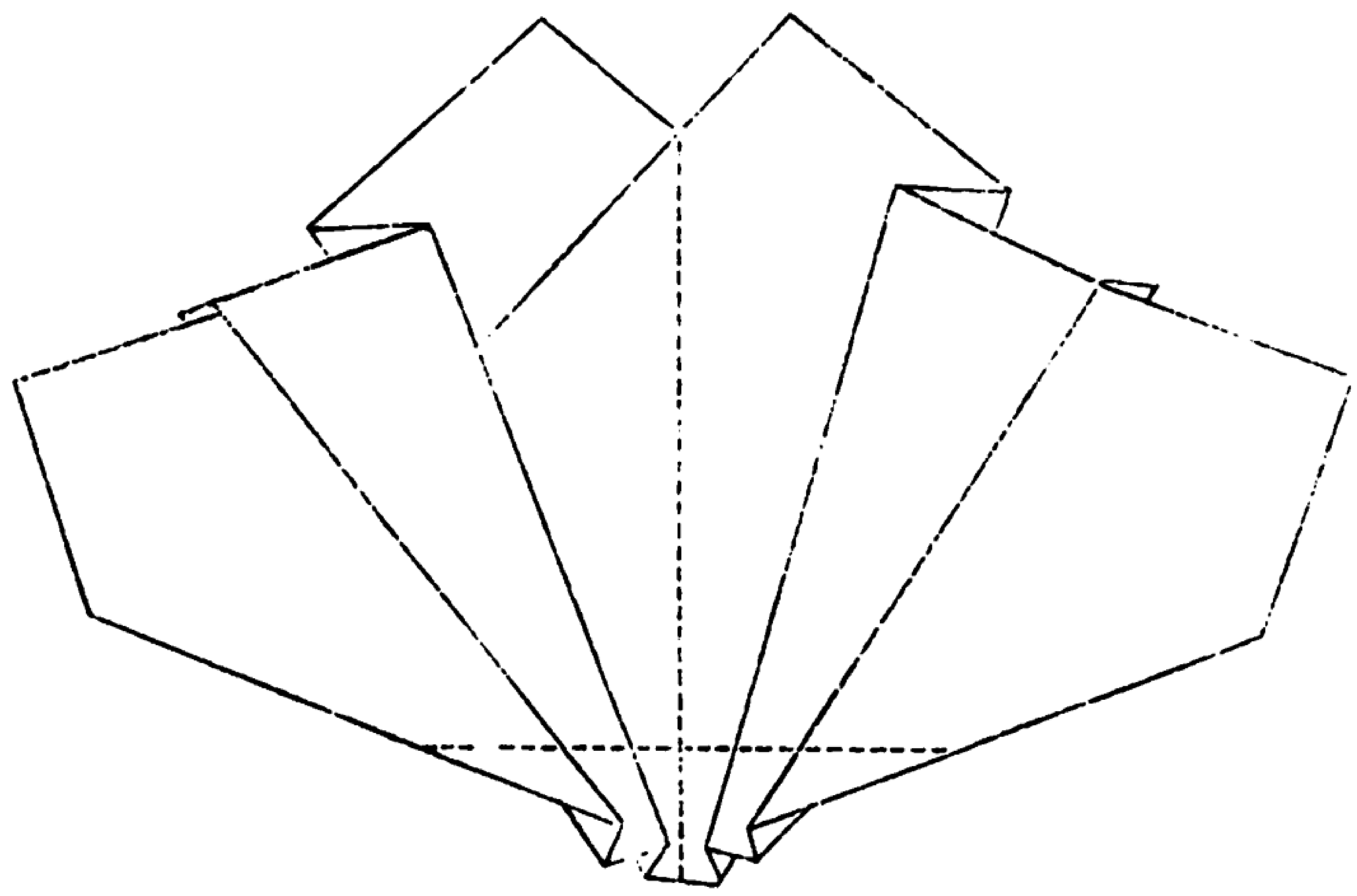
解



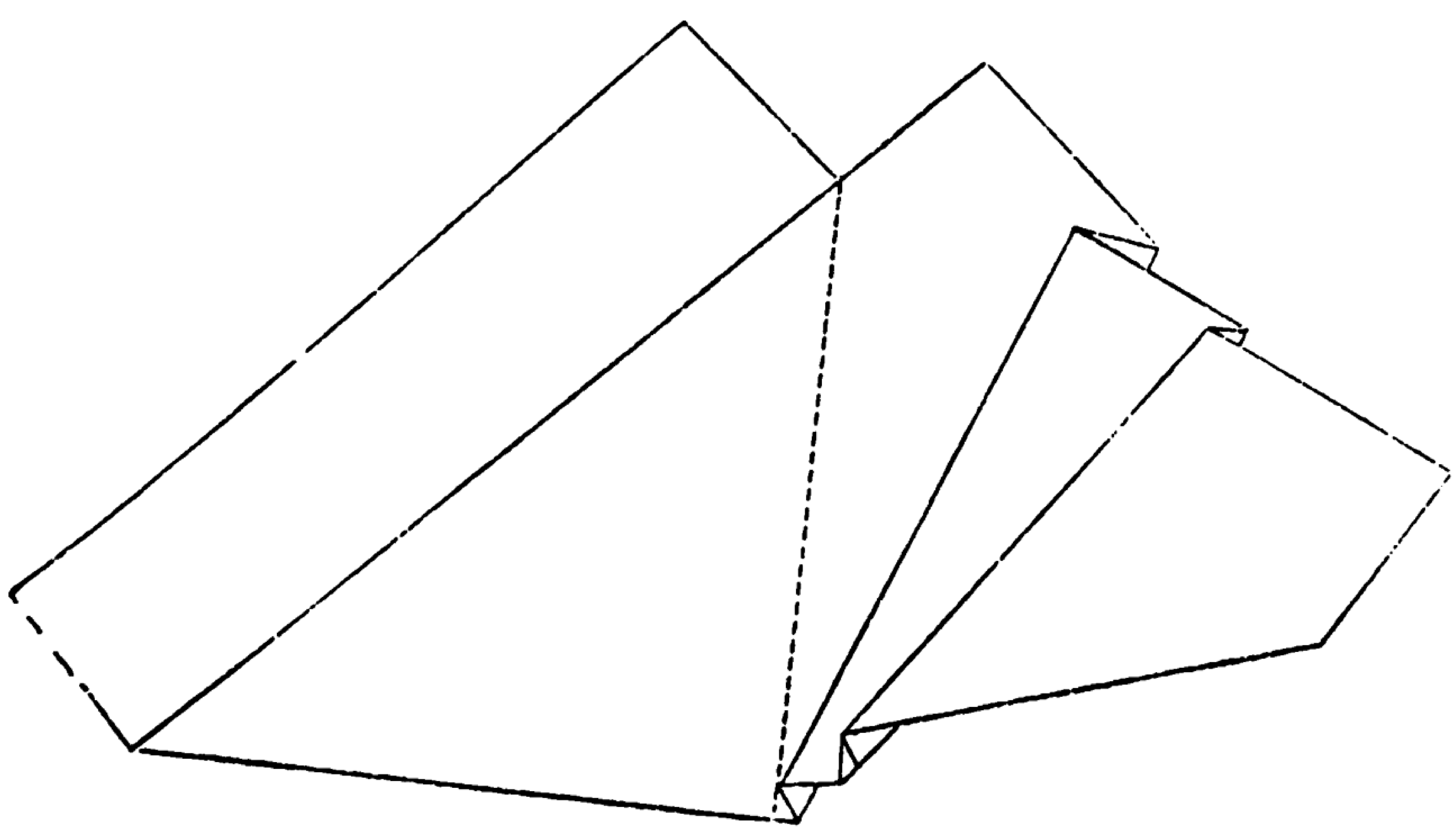
一砂金包

砂に交りたる金にて、不吹分以前也、包みて両替屋の印を押したる也、夫を折形に包み、水引にて括りたるもの也、又は下を折返したるもあり、

砂金包



解



家政雜事（六）

疊のもとする。　と申すは、如何しきやうにて候へども、疊表に致し候席に、もとゝ、末とがあり候、もとゝは、表を織るときに織りはじめし方、末とは、織りじまひの方にて候、もとの方は、藺のすぢ、横に眞直ぐに通りをり、末の方は中だかになりをり候ものなり、火燵をあけるとき、爐を切るときなどには、この本の方を用ゐたるがよろしく候、見てもよく、長くたもつものにて候、　（備後方）

雨のあたる處の障子は、　糊にてはりてよし、粉にしたるものならば、粉一合に、水五合ほどのわりにして煮るべし、芋ならば、むしてつきたるを用ゐてよし、之にて張りおかば、少々ぬれても、はがれること無し、
この糊は、鼠もきらふものなり、
又壁などを張るにも、つのまた、ふのりなどを用ゐるよりは、よく付くなり、　（たるま報）

漫錄

沖繩縣下旅行日記（二）

まゝく庵主人

十七日　普天間村にゆく。先づ、高等小學校を見る。玄關に、官員昇降口と、わざやかなる札かけられたり。この日は、校長以下、大方、中頭教育部會に出席のため、具志川にゆき、殘るは二人のみにて、はかぐ\しき授業もなき由なれバ、寄宿舍を見て、直に歸りき。寄宿生徒は、四十餘名なり。舍を、十室に分ちてあり。脚の、半缺けたる古机を、こゝかしこに、棄てたるが如く据ゑおかれたる、室の隅には、破れたる蚊帳、ゑわ勝なる衣服など、一纏にかけられたるさま、わがありし昔を、そゞろに思ひいださる。食堂は、竈おける土間に連りたる板間なり。方三尺、高一尺五寸バかりの、黑バみ汚れたる食卓、つみ重ねられ、その上には、芋の皮と、蕎麥の古碗やうのものと取りちらされたり。生徒は、皆、食料の芋を、家より取り寄せ、唯、間切より補助せらるゝ金三拾錢を、菜の料、薪油の料として出すのみなりと、賄方は、小使兼務、總べてかゝるさまなれバ、賄征伐などいふ惡習なく、賄方萬歳なるべし。普天滿宮に詣づ。學校の近くなり、大きなる鳥居をいりて、一町ばかりのところに、拜殿やうのものあり。鎭西公の、弓絃をひき試て、怪しき土人の戲ける額など見えたり。例の芋の皮、又、われかけたる鍋盆など、取り散らされたる傍に、晝寝したるもの二人、さながら、乞食の住家なり。その後に、洞穴あり。闊五六間、石乳とかいへる

もの、氷柱の如く垂下せるあり。柱のやうに、下までつけるもあり。いみじき見ものなり。洞中に宮あり。鈴さげられたる宮のつくりさま、内地の宮拜みたらむやうなり。宮の右手に穴あり。長さ二三十間、後の丘の上にぬけ出でらる。左手にも穴あれど、狹くして入るべからず。この奥には、廣き場所ありて、そこには、淸泉湧けりと。五六年前、裸になりていりたる人ありしも、一町ばかりして、歸り來れりとぞ。洞の左手に、神宮寺といふ寺あり。住職にあひて、宮の緣記を問ひしに、即ち、これに委しくありとて出せり。その板ぺらを見るに、

普天滿山三社並神宮寺 在宜野灣郡普天間村東

普天間邑之東有一洞窟民常放在農器一日有觀音磁像奉安之于壇上則隣里之人有求祈之而靈驗掲乎影響焉此時安谷村有一夫婦常爲農業儉勤兼全然五穀不登賦稅多缺于是妾請夫曰妾賣身于他家以納稅賦若得一點暇時以便紡績良人盡力于田畝以供家資若天賜洪慈以爲贖身再爲夫婦偕老之契夫婦流淚而別焉即剪髮爲髢賣之于市上以買祭器每夜到普天滿焚香許願已歷三四年九月之夜獨身赴普天滿行到鳥居邊偶逢一老人婦女大驚而要退居老人曰勿爲驚訝吾托汝看守斯物婦女曰妾爲人之婢然有女一點情願拜謁神社若非速去恐有獲其罪再三固辭老人强勸寄在婦女不得已而守護焉老人遂去不知其所之無奈之何便携其物回至首里厥後屢次携去並不再見竟要遇其老人許願其夜有夢告之曰神要賜汝特來托汝時曉鷄拍翅驚人好夢覺

來不明次夜復爲念願果然夢賜明告於焉乎開封見之內有黃金數塊也將其黃金速要贖身奈主人無嫉女難以告去亦閱二秋終以其神賜事細達主人即欲黃金而贖焉既而大爲還願以告石龕奉安　觀音于其中漸次家資殷富子孫繁榮夫婦偕老由是遠近之人遍聞其事皆到于此而祈禱焉一説首里桃原邑有一處女賦性貞靜姿色絕世之人皆聞之多媒求之不許嫁況復恒居閨室閉戶杜門不與人看又有一妹至于成長出嫁某家其夫奇異之遂告婦女曰汝姉深避人氏不敢出外予今爲汝婿夫無姉相見請乞一見汝姉婦女曰姉志幽癖不似人情若告此言必也推謝不准今日妾詣父家與姉相話則丈夫倏到其座以爲相見而歸去父家姉妹相話之間丈夫果從其言倏然而來以便一見姉即愧妹夫相見出外而去家人趕去姉到普天間直入洞內而去家人往尋其姉不見其踪跡由是人皆尊以爲神有祈求者必詣此處而祈禱焉此二説歷經已遠莫從稽詳

（此の文、訓點を施しつれど、もし誤もあらばと、わざと省きつ）

と、誠しからぬやうにも記しつけられたり。熊野に在て神を遷祀し奉れるものなるをや。寺に、武內宿禰、譽田、天皇をいだき奉りて、神功皇后の御前にかしこまれる額あり。住職は、まだ、何とも知らざりけむ。余に、コレハと問。あつぱれ、この僧が、神宮寺の御住職。かゝるしれものは、疾く死ねかし。歸りて、大吹洞にゆく。村のはづれにあり。この洞は、道路の下を通して、あなたの森に出口あり。洞の入口、いと廣し。その周圍に、人骨多く埋められたり。この墓は、古代のもの、

由にて、瓶なども、質素にして飾なし。形は、今のと、圓形と、方形となり。瓶の蓋のうちには、死者の姓名を記すもの丶由。瓶破れ、あらはなるも多かり。そこより、東の方、即ち村の横手に、隱猫洞といふあり。山猫住めりとて、かく呼ぶなりと。昔は、村人、この所に集りて、組踊しその折、この洞より、突然にをどりいで丶、觀客を驚かさむとて掘りしものなりと。傍の人は物語りき。そこより、東にかたよりて、小高き丘あり。登帝君を祭れるより、その丘をぞ、唯登帝君とぞ呼ぶ。あたりの景色見えて、おかしき所なり。こ丶らあたりは、秋風も、まだ吹きそめぬに、稻は苅り盡されたり。蝗の、居所を失ひて、さまよひありくを捕へなどす。夜になりて、玉那覇か丶るもの食し給ふや、茶うけなどにもと、蝗の燒きたるを出す。今日、この蝗を見るにつけて、いと悲しきことあり。

余がすゑに、猶一人の弟ありき。廣之亟といへり。彼は六歲にて、われより二歲劣れり。兄君二人と、姉上とは、學校より歸らせても、大方、家におはして、父母の業をたすけ給ひけれど、常に、二人のみにて、いで入り遊ぶ。春は、野に出で丶、酸茶を探め、タンポポの花を折る。夏は、河原にゆき、石を積み累ねては、流を堰き留めむとし、砂を堀じては、魚をおとしいれむとす。秋にもなれば、日ぐらし、田面を走りめぐりて、蝗を捕ふ。下部どもの、苅り入れにいそがしきを知らで、そこに二疋にげつるは、

それ捕へてよ。鎌などうちおけ。そこわたりを、皆捕へねなど、呼むひあふ。又、下部どもの、日も、はや沒ちかたになりぬ。御二人ども、いざ諸共にと、うちあつまり、そゝのかすをも聞かぬふりして、猶、殘りて捕へたり。野らのけしきも、物さびしくなれど、廣サン、疾く來と、いそぎにいそぎながら、遲足奴等、いつかは　われ等より先には歸りしなど、走りぬけさま、下部どもを罵りて歸る。家の門邊には、母樣、ただずませ給へり、鷄も、をつが床に上り、雀、鴉、又、旣に、その巣に歸りて、こゑもせず。世の中、かく、物靜になりぬるに、など、歸るおとの聞えずやあらむなど、つぶやき給ふめり。いみじう案じつる、又、例のかと叱られながら、

左右より寄り近くを、兩手にひきつれて、家に入り、竹串などもとめ給ふ。さて、蝗を串し給ひつゝ、二人に、明日よりは、疾く歸り來よかし。廣之丞は、最早ねむからむを、夕飯の料にとて、大なる魚買ひおきつ。かゝる蝗など、昔は、下賤の外は食はぬものなりしぞなど、をしへ給ふ。さりとて止め給ふにもあらねば、晴れたる日には、今日は捕へよし、雨降る日には、かうやうなる折は、よく飛び得ねばとて、大方、いでぬ日はなかりき。さるを、その秋の末つ方、馬皮風とかいへるにて、弟は、紅葉と共に散りうせつ。その後、わが身も、東の都にいでたる果てが、南海にたゞよふことゝなりぬ。母樣は、猶、門邊にて、いかに待ちわび給ふらむかし。

さはれ、わが身は、再び、袂にすがる期あり。亡くなりてし弟は、何時か。あはれ。又、いつの世にか。

など、思ひつゞけて、外邊を見やれど、五日の月、心細げに、松のあなたにさまよひぬ。(つゞく)

三卿三說(つゞき)

松野操雄

この庭訓は、定家卿より、衣笠内府の許に贈られしものなり。諸孃、その心して、見られんことを要す。

和歌座訓　藤原定家卿

毎月の御百首、よく〳〵拜見せしめ候ひぬ。凡、此度の御歌さま、誠に難レ有見申候へバ、おろか成る心に、かたじけなき仰せごとの、いなみがたきバかりを、かへり見侍らふとて、わづかに、先人の申置きし庭訓のかたはしを申しさぶらひき、さだめて、後の世のわらはれ草も、しげう候ふらんなれども、さすがに、其跡やらんと、御歌も、ことのほかに、よみつのらせおはしまし候へど、返々、本意に覺えさせ給ひて候、抑、歌は、たゞ、日ごろ、しるし申侍りしごとく、萬葉より此かた、勅撰を見かへして、代々にかはりもてゆき候すがた共を、御心得候へ、それによりて、勅撰の歌なればとて、かならず、歌ごとに、とりてまなぶべからず、人にともなひ、世にしたがひて、歌の興麿見ね侍り、萬葉集は、げに、代もあがり、人の心も、またく、今世には、まなぶとも及べからず、

常、心有體のうたを、心にかけてあそびし候へ、但、すべて、此躰の、よまれぬ時侍るなり、朦氣さして、心底みだりがはしき折は、いかによまんと案ずれども、有心躰の歌、出來せず、それをよまん／＼と、案じ侍れば、いよ／＼、性骨もよわりて、無心躰侍るなり、さらん時は、先、景氣の歌とて、姿詞のそめきたるが、なにとなく、心はなけれども、歌ざまの、よろしく聞ゆる様を、よむべきにて候、かゝる歌だにも、四五首よみぬれば、朦昧も散じ、性機も麗しく成りて、本躰のよまるゝ事にて候、又、戀、述懐などの題を得て、ひとへに、たゞ、有心躰をのみよむべしとおぼえ候、此躰ならでは、よろしからぬ事にて候ふべきか、扨も、此有心躰は、餘の九躰にわたりて侍るべし、そのゆゑは、幽玄にも心あるべし、長高きにも、又心侍るべし、殘の躰にも、又、かくのごとし、げに／＼、何の躰にも、實は、心のなき歌は、わろきにて候、今、此十躰の中に、有心躰とて、つらね出だし侍るは、餘の躰の歌の、心あるにては候はず、一向、有心躰をのみ、さきとして、よめるばかりを撰出だして侍るなり、何躰にも、たゞ、心有様を存ずべきにて候、

（つゞく）

兄弟のなかをよくさするを

なまはづをとて

猫と犬とは中あしきものなれど、或人、其のちさき時より同じ器にて食物を與ふるとせり、大き

くなりてのちにもなほ中よくして、あらそふことなかりしとぞ、
人の上を、犬猫にたとへていふは、如何しきことながら、同じ生きものなれバ、其情は同じかるべきなりされど、人の子も其の心をもてそだてなバ、人となりての後にも長く睦じかるべし、夫につきて一つの心得あり、たとへバ、多勢の子供の中、ある一人が、物をほしがりなどするとき、之はおまへのみにやるから、兄さんにはないしやうにしな、といふやうの詞、をりふし聞くとなり、かく一人のみに物をあたへて、他の兄弟にしらせぬを、かさなりかさなれど、遂には兄弟中をあしくするもとゐとぞなりぬべし

かやうに只一人にのみ、ないしやうにて與ふれバ、其の與へられし子供は、其の時はなりよろこぶべし、もし其事、他に知られずしてすまバ、よし、ふとしたる事より、他に知れたるときは、物を得ざりし子供は腹立つべし、一度かゝる事あれバ、已前にも、此の後にもさることありしならん、あるべしと推しはかりて、氣をわろくすべし、これ即ち中のあしくなるもとなり、
又このないしやうにて與へられたる子供も、其の時は、それにて、いたくよろこびもすべし、併ながら、後々に至り、他の子供も、さやうにないしやうにてもらふとありもやせんとの疑の心起りて、之も後々の中あしくなるもとゐとなるなり、このないしやうといふ事、初はいさゝかのことなが

ら、後々にはおもひの外、大きなる事になりて、これが爲に、家をもやぶり、財をも失ふに至りぬべし、呉々も心すべきなり、

もし又、それとは事かはりて、一つの菓子をも別ちてあたへ、朝夕の食物も必ず同じとき、同じものを食べさす事とすれバ、などか中あしきに至るべき、

東照宮は何事にもあれ、常には嚴しくして、不意の事起りたるときには、少しもさわがず、常よりもなほゆるやかにましゝとか、

一家の母たるものあらかじめ其の心得あるべきなり、一度兄弟の間中あしくなりては、又とりかへすべきよしなし、親のある間はともかくもありぬべれど、無からん後には、夫が爲に、親をもはづかしめ、先祖の名をけがすとにも至るべし、

それにつきて一つのはなしあり

矢部駿河守兄弟の訟を決すること

昔天保の頃、矢部駿河守といひし旗本あり、學才すぐれたる人なれど、世に用ゐられて、江戸の町奉行、即ち今の東京府知事の如き役に進み、かの水戸の烈公よりも和歌を賜はりし事ありし人なり

この駿河守、未だ堺奉行なりしとき、不思議なる訴こそ起りけれ、其の訴人は、我は某の弟なりといひ、訴へられし某は、彼は我弟にあらずといふなりけり、

二人の親も久しき已前に死したるとなれど、問ふべきよしなし、親類のもの、近所隣の輩をよび

出で丶問へども、誰ありて其の事を知れるものなし、

弟の申す旨によれど、腹がはりながら正しき兄弟なり我貧しくて、世を送るによしなし、兄は多く財産をもてる故に、兄弟たる因に我身を養ひ呉れよといふなり、

兄はさるもの少しも知らず、我家に財産多くあればさるいつはりをいひて、かすめ取らんとはかるならんと答ふ

駿河守、再三、二人の申す趣きを聞きとりて、さておもふやう、弟の申す處、誠なるべけれど、兄の承知せぬには深き故あるべしとて、猶呼び出でて諭していふやう、世に兄弟多きものは互に助けつ助けられつして、憂きをもなぐさめ、つらきをも忍び、又よろこびをわかち、楽しみを共にして、睦しく暮すものあり、されど不仕合にして兄弟なきものは、縁りも無き他人をも親しき友とたのみて、互に力をあはせて業をもはげみ、折ふしのとひとぶらひをもして、交るものもあり、さるに汝が如く正しき兄弟はありながら夫をもかへりみぬとは如何なるこゝろぞや、我かく誠をつくして諭すとも、我徳至らずして、汝はなほ心をあらためざるべし、併ながら、なほいひ聞すべきことあり、古き歌には

無き名ぞと人にはいひてありぬべし
　　こゝろの問はゞ如何こたへん

といふにあり我問ふには弟にあらずと、かたく云ひ張れども、もし汝の心が、汝にたづねなば、如

何申すぞ、かくてもなほ實を申さずやといひけれど、さすがに其の詞に深く感じけん、乃ちさしうつふきてぞ、恐れ入りける、

さてその兄、泪をながして、いふやう、かれは、實に正しき我弟なり、我父世にありし頃、さる處に女をかくしおきて生せたる子なり、其頃我はなほ幼かりしが、父は人知れず物など持ち行きて彼を養ひけり、子供心にこれをうらやましくねたましくおもひ、はては彼が事の憎くゝさへなりけるなり、されど今までは弟ならずといつはりて、彼を助けんとはつゆおもはざりしかど、心のとはゞ如何答へんと仰られし詞に感じて、恐れ入り候なり、今までいつはり申せし罪のがるゝ處なしと、已が惡事を懺悔せりかくて兄弟のなのりをし、共に家にかへりて、財産をわかちて共々に永く榮へしといふ。是は母親異り、且つ他の家にて育ちたるなれど、同じ腹より生れし兄弟の、同じ住居の中にて人となりしとは、もとより異れど、かのないしやうのものを與ふるよりして、始はうらやましくおもひ、次にはねたましくなり、遂には憎くゝなり、果てには訴をも起すに至るとは同じかるべきなり、三つ子のたましひ百までといへど、幼きときよりゆめ／＼おろそかにすべきにあらずなん

老の心

此は、上杉鷹山侯が孫女、參姫君の、上杉齋定侯に配せられて、出羽國米澤より、江戸邸

に趣きたまふとき、おくりたまへる誡言なり、今古時勢の異なるものありといへども、そのこゝろに於きては、今も猶、この老の心を、心とすべしなどおもふも、亦老の心くせなりや、

遠江　松竹居主人

此度、出府し給ふによりて、永く心掛にもなりなん事、書記してと、望む事最浅からぬ志と感じ入候ひぬ、天性美質におはする上、幼より書籍も讀習はれ、婦道婦徳の事も、粗聞及どれしなれど、今更拙き筆を以て、事々しく云ひなさんも、鳴呼がましけれど、かく請はるゝの志はらしく、且は又御身に望む心のなきよしもあらねど、只其の有の儘を　文章をも修めず、浅近の事共左に書記し侍る、

一夫人は、三つに成りて、父母是を生じ、師是を教へ、君是を養ふにて、何れも深き恩義ある中にも、深く貴きは是父母の恩なり、父母の恩と云ふは、山より高く海より深き事なれバ、此の徳に報いんには、迚も及ぶべきよしあらねど、責てはその萬分の一をもて、心に及ぶだけ力の及ぶ丈々を盡して、勉るを孝といふなり、此の身天地の間に、生れいでたる根本の父母に事ゆる道なれバ、百行の基万善の先とも云ひて、人の身の行ひ孝を以て第一とするなり、夫女は、他門へ嫁し、他の父母を以て父母とし、他の人を以て夫とし、他の親戚を親戚とする事、和漢古今先は婦女の通則なり、我が身の行ひ正しく、我が心の誠だにあらど、何國いか

なる處へ嫁し候とも、舅姑の慈愛を得、夫の歡心を得、親戚にも和合なるべけれど、他門の事なれど、是に事へて其の心に適はむ事、容易に心を用ひては、事ふべく處し得べきにあらぬなり、然るに御身の事は、如何なる果報なれど、我が家に居て我が父母に仕へ、終身膝下をさらず、外ならぬ式部殿に配し、(齋定侯家督式部大輔と稱す)我が親戚を親戚とし、譜代相恩の人にいつき冊かれ給ふ、上もなき幸福にて、何の心か勞し何の身をか苦しかるべきや、然らばか程の幸福を得られし上は、又夫程の孝順貞節を盡し給はねば、この幸福を永く保ち得給はぬことなり、されば此の幸福を、得られしことを恐れ懼れて、身の行を、正くし、朝夕に孜々として勉め給ふことにあり、さてその孝順貞節といふに、仕方ヶ條も樣々ある事にて、聖賢の敎より先哲の格言、追々見習はれ聞習はれたる如く、初にもいふ如く拙き筆に著すべきにも及ばぬとなり、其の聖賢の敎戒先哲の格言といへども、目に見耳に聞たるのみにて、是を心にとゞめず身に修し行はざれば、用に立ざると也、身に脩し行ひたまふといふも、今視今聽て其儘行ひ得らるゝものにはあらず、日を積み年を重ねて、朝夕に心を放たず修行するになくては、我が物になし得ぬなり、我が物になし得ぬことにては、物眞似といふになりて、感通せざるなり、其の仕方ヶ條種々ありといへども、詰る處、此の身天地の間に生れしことは、父母の洪恩にて、この身は父母の遺体なる事を常々わすれず、眞實より父母をい

ことをしみ、大切にする心毛厘も僞なきが其の根本にて、此の處に誠あれバ中らずといへども遠からず、事品の上において少しの手違ひ間違ひありといへども、届かぬといふことはなき事なり、此の事は我が身不才不徳にて、行届かれず及ばれずと讓るべきことにあらず、志をみて心の及ぶだけ力の届くだけ十分に勉めて、心にうらみなくして止べきなり、既に心の及ぶだけ力の届くだけ盡して勉れバ、いつしか徳も進みて才も達する事ぞかし、盡しつくさるべきにて候、

一男女の別は人倫の大節にして、男は外に位して外事を治め、女は内に位して内事を理るなり、治國平天下といへバ、大そうなる事の樣に思はるれども、天下の本は國なり、國の本は家なり、家齊ふといふも一家の男女正しきが其の本なり、其の本亂れて末治る事はなきことなり、千歳の今迄、周の治平を稱するも、文王大姒の美徳まし〱、寡妻に刑し兄弟に至り、以て家邦を御すとありて、其の初、大姒の能く文王の御徳に順從し給ひ、文王も亦大姒の輔けを得給ふて、御夫婦岐周の地に徳を積み給ひしより、其の教化の天下に推及びたるなり、今一通り考ふれバ、夫人の上は政事には預らざる樣におもはるれども、政治の本は一家閨門の内より起ることにて、即身を脩め徳を愼み、夫は妻の天なり、天には違ふべからずといふ事を、常々心に存じて恭敬を忘れず、閨門の内能々和諧して、式部殿の旨に從順し給ふ事、頓て式部殿の政事を助けらるゝなり、若き心にては、程遠き奥向に徳を

修めたれバ迚、其の和の一國に及ぶべきやと思はるべけれども、感通するの理は妙なるものにて、冥々に脩すれバ昭々に其の功顯はるゝ事疑なきことなり、鶴九皐に鳴て聲天に聞ゆるとこそ詩經にいへれ、其の徳正しく奥向能く和諧せむ、一國賢婦人とこそ仰ぐべけれ、既に賢婦人と仰ぐ日になりては、其の他の及ばざる事のあるべきや、近く櫻田の奥の（尾張夫人）彈正殿への事られ方、百里を隔てし我等へさへ、孝養淺からぬをむ、人々感稱する事兼て見聞せらるゝ通り也、能くこの徳に習はれよ、茲をおもふて茲ゝ在り、誠の有る處などか掩はん、勤められよ　（未完）

千世の濱松（三）

これも、前號にあげたると同じをりに、文恭院の第十七女盛姫君の作り給ひしなり。盛姫君、その頃、松平肥前守齋正朝臣の室なりきとぞ。

こたび濱の御園に、參るべきよし、仰ごとあり。其の折の料にとて、君の思召もて、おん文庫のうち、いろ〳〵の御品ども、下し給はせたるを、かしこみつゝ、拜しみるに、嬉しさ限りなく、深き御恵のほどは、濱の眞砂の數々も、よみつくしがたくなむ、先衣のいろめ、かゝへの帶は、世のつねならぬ、あやにしき、こまもろこしの織ものにも、まさりて、めもあやなり、ことに、又、うるはしき、おんこうがい、給はれバいとゞありがたう、見るもめづらしと、あふぎ奉りて

いかりなは濱邊の千鳥とり〴〵に
　たぐひも波のたまのかうがい

こゝにまたうちはのかたしたる、かさね硯を給ふ、是ぞこしのうちに、たづさへ侍りて、道すがらのこと、かきてんとて、ことさらにいと嬉しく、いかゞいひつゞけ侍らん

言の葉にすゞりの海のあさからぬ
　君が惠をかきて仰がん

又海邊の、さまを、そのまゝにうつしたる御鏡、白かねもてつくりなしたる花の御胴〆、御あふぎなど、のこるかたなき、御たまもの、すぐにいひつくすべくもあらずなむ、明暮出立む日を待しだに、嬉しきを、まひてけふは、葉月三日といふになりぬ、夜も明わたるころに出たつ、道すがらの家居、あまたあるを見やれば、賎が女の、はしちかうなみ居たるさま、いと珍らしと見つゝ、猶行ほどに、やう〳〵と濱邊のおましに、いたりぬ、こなたを拜し見るに、色々の草花に、あまたのいをども、とらせ置給ひて下し給ふこと、いとかしこし、猶人々にいざなはれて、海手の御茶屋に、いそぎいたりぬ、うみつら遠く見わたせむ

あかねさし出る日かげを波の上に
　見るも珍らしはまのあけぼの

夫より釣殿に參りぬ、釣するさをのさし引など人人のをしへ給へるに、いとうれしく、めづらしくて

海ふかき君とおみとのめぐみにて

けふぞつりえし魚のかづ〳〵

うちよろこびて、松のこしかけとなん、いへるに、しばしやすらふ、濱のみけしきぞもの付たる御たばこでん、御ついたてを、こゝにて下し給ふは、いと有がたし、驚くばかりになむ、又つばめの御茶屋には、かず〳〵の御いけ花を、置せ給ひて、見せさせ給ふ、かしこさに

打ちならぶ花のかず〳〵珍らしな
何れをそれとわきてめで見む

夫より中島のおましに參りぬ、いと〳〵うつくしう、つゝみなしたる、御たばこ、下し給ふを

もしはやく烟ならねどたてそへて
秋の日あかずこゝにたのしむ

なほさま〴〵の處々を行めぐりて、富士見の御山に登り見れば、いとようはれわたりぬ、

幾千里へだてゝとほき富士のねの
きりうちはれて見るはま近き

やがて漁舟の出るを、つけきたれば、海手の御茶屋にゆき、簾まぢかくよりて、漁父のあみうつを見侍りぬ、

うるはしや浪ゆたかにも網引する
海士の小舟を見るはめづらし

こゝをもうち過て、貝などひろひて、松原の御腰かけに、立よれば、ふかき思召もて、御切花かずかず下し給はりぬ

あかずのみ恵のはなのかず〳〵を
猶たのしまむあきのあけくれ

とあふぎ奉りて、尚日ごとの、もてあそびにせん

こゝ思ふもいとうれしくなん、其處をも打過て、壚がまのほとりに參りぬ、五色の壚などたまはりぬ

見るはけふ始めなりけりあま人の
　もしはやくてふおのが仕業を

夫より御亭山にいたりぬれば、色ふかく咲たる、水葵に、おんさげ重をさへ、給はせたるかしこさ、いはんかたなし、又遠目鏡を見て

遠のうみ波のあなたを行くふねも
　こゝにうつして目に近く見る

倘行〱庚申堂に立よる、又ほどなく、五番堀にいたる、こゝにも色々の、うるはしき玉ものを、かざらせ給ひて、下し給はりぬ、いと有かたき御惠のかず〱を、あふぎ奉る、かたはらには、虫の聲多く聞えければ、まことにめづらしく嬉くて、行見れは木ごと垣根に、かけおかせられたる、御惠の露、深きおん籠など給はるもあり、又草むらごとにすだく虫の聲に、聞入てあまたとりいつゝあそびぬ、

御園生に君が千とせのまつむしの（下句欠）

かぎりなき面白さを、深くあふぎつ、倘行程に、新錢座といへるにいたりぬ、くだものやうのもの、かず〱を給ふ、やう〱觀音堂にまうで、こゝかしこあふぎ見て、なほ釣のおもしろさ、わすれがたきまゝに、又釣殿に參りぬ、こたびも二つ三つかゝれり、ひねもす殘るかたなき、御まうけどもの、有がたき、いひ盡しがたき、御惠のかしこさは、千ひろのうみも猶あさしと、かしこみあふぎ奉りて、

海ふかききみがめぐみは幾千とせ
　あふぐもたかき濱のゆふなみ

はや日も暮はてぬれど、名殘おしくも立かへり侍らむに、けふの御惠のかしこさ、心にみつるほどは、千々の一つだに、聞えあげ奉らぬことの本意なきに、只かしこまりはゞかりを、つたなき筆にかひ付て、御かたはらに奉る、よきにたてまつり給へ。　（をはり）

門田のさなへ　（つゞき）

おのがねに、つらきわかれの、ありぞとは、おもひもしらで、鷄やなくらん、

藻壁門院の少將といへる女房の歌にて、定家卿も、殊に、ほめ給へり、實に、面白き歌なり、曉の鷄の聲に催されて、きぬ〴〵のわかれするを、かれはさもしらでなくよと歎くなり、これによりていはゞ、何の思ひはかりもなく、人の上の事を、はめそしることの葉のもれて、或は睦しき中もあしくなり、君のおぼえも、疎くなるやうのこともあるべし、かりそめの言草も、人のため心すべきものなり、女はまして、言多きものなれど、女の口より、禍のおこることゝ、いにしへ今にためし多し、

うつろはで、しばし篠田の、もりをみよ、かへりもぞする、くずのうら風、

これは、和泉式部が、和泉守道貞にわすられける時に、赤染衞門の、よみて贈れる歌なり、篠田のもりとは、道貞、和泉守なりけるによりて、その

國の名所を、とり出でたり、源氏物語にも、和泉守といふことを、しのだのもりといへり、葛は、しのだのもりに名高ければ、それが風にうち吹き返すによせていへり、うつろふも、亦、葛の葉の色つく縁なり、歌の意は、今、彼人に忘られたりとも、こなたの心は、うつろはでしばし見よ、またもとに歸る事あらんと、かの式部が心ぐせの、あだ〳〵しきを諫めてよめり、式部のあだ〳〵しきは、紫の日記にも譏れり、歌は上手なれど、此くせは、千歳に誹を殘しぬ、凡、妹脊の中には限らず、心短く、物ごとをうちふてぬるは、よからぬことなり、うちしづまりて、いかになるべきものぞ、よく〳〵考ふべし、にくし恨めしと思ひし人の、おもはずに、自、そのあやまちをしりて、心を改め來るも、世にあることなり、

いつはりと、思はで人も　契りけん、かはるならひの、世こそつらけれ、

女の歌にて、ことに殊勝也、誠に、はじめより、僞りせんとは思はねど、末とげぬからに、いつはりになりぬるは、世のならひ也、人を恨まで、變るならひの世を、恨みたる心詞、たぐひ少くおぼゆ、大かたの人、この心にてあらましかば、人に恨みも少く、心もやすかるべし、あるひは、

忘らるゝ身をば思はずちかひてし、
ひとのいのちの惜しくもあるかな

とよめるを、よき志なりとほむる人もあれど、それはよく思はざるなり、これは男を惱まして、口がしこくいへるなり、歌は面白けれど、此たぐ

ひにあらず、よく思ひ辨ふべし、

底ゐなき、淵やはさわぐ、山川の、淺きせにこそ、あだ波はたて、

やはといふてにはは、うち返して、やはさわぐ、さわぎはせずといふ意なり、誠に、淵の深きは、水も靜に、淺き瀬に波の立つは、現在のこと也、人もかしかましく、かりそめにも、歎き、喜び、恨み、怒るやうの人は、心淺きなり、自ら、返り見るべし、或は萬のはからひにもあれ、藝能にもあれ、われかしこげにさし出で、智惠ぶりをし、知りたる顔するは、智も淺く、藝も未熟なるなり、よく思ひめぐらす人、よく習ひねたる人は、然らず、聖人の徒にも、子貢の辨才は、顔淵の愚なる如きに、及ばざる事、遠しとぞ、

よをすてゝ、山に入るひと、やまにても、猶うき時はいづち行くらん、

山の法師のもとへ、凡河内のみつねの、よみてやれるなり、これは、法師をなじりて、よめるなれど、是歌につきて思ふべし、厭ふても、雲には乘ぬものなれど、衣類の煩らひをはじめて、とにかく、かゝづらふことはありて、猶、うきふしのなくしもあらじ、其時は、いづちへ行くべきや、大方心淺き人は、さしあたりてうらめしくも、腹立たしくもある時は、法師にもなり、尼にもなりぬれど、時ありて、又、よしなきことしたりと、悔む人もあれど、よく／＼思ひ靜むべし、源氏物語の品定に、人をうらみて、尼になりたる人を痛みて、あたら御身をなどいはれて、くやしき心、出

でくる趣をかけるも是なり、されど、若き女たちは、此〻に心を留むべし、

住めどまた、うき世也けり、よそながら、思ひしまゝの、山里もがな、

これも、前の歌を思ひてよまれしにや、兼好法師はよく、人情に通じたる人なれど、殊に、哀れに聞ゆ、よそより思ふと、其所に居て見るとは、何事につきてもかはるべし、貧者は福者を羨み、賤者は貴人をうらやめども、福者は福者の煩ひ、貴人は貴人の煩ひ有りて、天地の間に生れたる者、やすき事はなきにこそ、

かくばかり、へがたくみゆる、よの中に、うらやましくすもすめる月哉

餘りにせん方なきまゝに、月を羨みたる也、されど、月もし心あらば、東に出で、西に行めぐる勞、いか計ぞや、雲におははれては、光も空しく、また、夜々に滿欠し、或は時ありて蝕にあふ、然れど、是も亦、羨むべからず、唯おのれ〳〵が、うけ得たる分を、安ずべくこそ、

家にあれど、笥にもるいひを、草枕、たびにしあれど、椎の葉にもる、

世の諺に、憐れむ子には旅させよといふも、理にて、常には、かりそめの調度、うち喰ふものにも、淸らをつくして、とかくいふ人も、わが宿ならぬ所にては、せんすべなく、椎の葉やうの物にも、飯をもりて喰ふためしをおもふべし、近世の俳諧に、木曾路のおもむきとかや、大名の寢間にもねたる、寒さかな、と聞えしも、げに、さ

ることなるべし、凡、旅には限らず、常に、變を思はゞ、常のやすきを悦ぶべし、又、變にあひても、俄に、驚き歎くべからず、かゝらぬ者の心もわがまゝの思ひも、自らに、しりぞきぬべし、

こほろぎものがたり（承前）

師岡須賀子

てふ

花のいろにこゝろをよせて迷ふてふ
　あはれとおもへ竹のはのつゆ

きりぎりす

けふよりは深き思ひのきりぎりす
　鳴けどあはれと問ふ人もなし

ほたる

草のつゆ水のあわとも消えやらで
　たえぬ思ひにもゆほたるかな

蚊

ゆふぐれの軒のけふりにたち迷ひ
　忍びかねたる身こそつらけれ

はへ

玉だれのにしきのとこの上までも
　はへあがるこそ嬉しかりけれ

黄金むし

やまぶきの色をあらそふ黄金むし
　草木もなびくひかりなりけり

松虫

夜もすがら戀しき人をまつむしの
　音を鳴わぶる野邊ぞつゆけき

くつはむし

ものおもふ心のうちはくつはむし
　人もなさけをかけぬ身なれぞ

かまきり

草の葉をかまきり立てかる野べに
　つゆのうき身の置どころなき

日ぐらし

何となく今日も日ぐらしわすは又
　いかなる方に身をやかくさん

くも

あやしくも斯るはかなき住居をぞ
　とひくる風のたよりだにうき

けら

塵くづに身はうづもれて過けらし
　いづこを宿とさだめざりけり

あり

山ふかきくち木の中にありながら
　峯のあらしをよそにのみきく

げぢ

よしなくも人のけちをぞ受ずして
　世に悩まるゝ身をくゆるかな

いもむし

我が住しいもかはたけは荒にけり
　ことしの夏は日でりのみして

みゝず

あさましや頭もしれず尾もしれず
　つちの中にて音をのみぞなく

毛虫

如何にせんわが身のけむし中々に
　人のみるめもさすがはづかし

とかけ

世を捨てゝ柴のとかけに引こもり
　いかでか人のとくとなるべき

へび

いたづらに身はくちなはに成果て
　結ぶえにしのたよりだになし

のみ

ひとりのみおもふ心の甲斐もなく
　とびたつバかり物ぞかなしき

しらみ

おもふことかきくどく間に長月の
　夜はしら〳〵と白みこそすれ

むかで

兎に角に世をバそむかで渡るべし
　あまたのあしも頼まれぬ身は

たるらむし

悲しやと音をころなかめたるら虫
　こゝろのうちを思ひしれかし

とび虫

羽根もなく行くへもしれず飛虫の
　おもはぬ淵に身をなげにけり

ゐもり

苔ふかき水のそこにてもろともに
　としふる郷のゐもりをぞする

かへる

古さとに立かへるとは知りながら

つちかき分てとふひとのなし

やすでむし

雨降れどかやが軒ばにあつまりて
こゝろやすでと遊びぬるかな

せみ

はなしや身はうつせみのから衣
猶うらめしきわきかせぞ吹く

申ていはく、此三十六首の詠歌は、むかしの歌仙を學び、判者は藪の小路中納言藤原ののぶつら卿なり。蟋蟀殿の御ものがたりに夜も更け、また歌の座席に時移り秋の夜ながかしと申せども、はや横雲もはれんとす。此所に長居は無益の御とにさふらふ。東細布の鳥の聲も、おそろしく、とく〳〵住處へ帰り玉へといふに、ゐもりが此由をきゝて、かへるの歌の、評義をやそねみけん、やがてよめる

立もせず下にも居らでさわがしく
かへる〳〵と云ふぞをかしき

蛙大に腹をたてゝ返し

淺ましや墨のころもに身をそめて
なぞか色にはふかきゐもりぞ

いづれも論ひけるを、こほろぎ出でゝ、かたみにかひなき御事也、とて玄づめ、おの〳〵暇でひして、藪の内へぞ入りにける。誠に、れき〳〵の歌よみなりけり。あなをかしや。

（をはり）

女畫師

乙羽庵主人

其三

花は嵐山に老て若葉と變り、楓葉は栂尾に褪て、霜に白髮の俤を殘す。春やまた來る春なれど、年々歳々同じからざる人の、花見に粉黛の粧ひを凝らしては、見る間に秋の雨の物悲しくも、木枯の哀れぞ誰しも遁れぬ約束事なるべし。されど千種有功朝臣も、和歌とし云へば、見ぬ鬼神をも挫ぐべき力ありしも、述懷の一首に病魔を追ふ由も無く安政元年八月の末つかた、享年五十八歳にして、寄る年波に洗はれたる枯木の、脆くも朽折れ給ひしかど、池旭の嘆き一方ならねど、さてあるべきにあらざれば、野邊送りにも餘所ながら御供し奉り、それよりは精進潔齋して、朝臣の冥福を弔らひけり。

斯くして十とせあまりの星霜を送りけるに、池旭が手腕は益々進み、評判いよ／＼高くなりて、今ははや氣丈の女畫師とすら云へど、人皆名を云はでも、それと點頭く程なるにぞ、お室に一本の名花を添へて、池に類も嵐山の麓は、さても名代の多き處

と、大原女までが噂しけり。

色も目出度き千種の御家も、有功朝臣の御隠れ遊ばしてよりは、何となう物足らぬ心地すればとて、池旭もしげ〳〵は參らざりしが、御子有文朝臣御家督ありて、頓て貴き司にもなり給ひけるに、和歌は父君に劣らせられず、器量は衆に勝れさせ給ふのみならで、下々の者を愍み給ふ御心の深きより、池旭も有功朝臣御在世の時に變らず召出されて、畫の御用を仰付らるゝこと屢々なりき。

兎角する間に元治元年とはなりぬ。流石に物靜かなりし京の洛中洛外も、去年將軍再度の上洛ありし頃より、世の中何となく騒がしくなりて、枕を高く寢られずと、四民の恐怖頻りなる中に、花散りて八坂邊は時鳥の若葉を戀ふ四月の初旬に至り、奥州會津の太守松平肥後守京都守護職に任ぜられ、禁裏を嚴に守護し奉るものから、今にも合戰の始らんかと、人々安き心も無し。

會津は德川幕府の緣家なれば、たゞさへ飛ぶ鳥の落んばかりの勢ひなるに、辱くも主上の御思召淺からざりしにぞ、威權赫々として、門戶に光彩を添へたり。

昔し木曾冠者は旭將軍と呼ばれたる猛者なりしも、禮儀を知らぬ山男と京童に嘲け

られ、これはまた東國武士の毛脛荒きも。野暮と云はれぬ金紋前箱の威光は、本國から三百餘里の長道中を、下に居らうで通らるゝ家格は、京の屋敷も格別廣く、况して肥後守は當時の利手八方の士に交を結びて、其名もいと高かりけれど、二位三位の大宮人も、一歩を讓りて、親しみ給ふが多き中に、千種有文朝臣とは別懇の間柄とて、何日も隔意無くうち語らひお在しけり。

未だ暑からず寒からぬ初夏の夕暮に、肥後守は奧庭の椽頬に腰うちかけて、黒みかかる庭の面を眺め給ふに、藤棚の花の色は昨日の雨に褪めて、池の水に名殘の落花を散らし、石橋に新苔青くして、笠松の翠を奪ひ顔なり、夕陽沈んで桐の葉蔭に風清く、昨日今日懸けしばかりの青簾に、風鈴の觸れて鳴る音も床し。頓ては黒む夜の色に、松の葉より晩かゝりて、杜若の花の白きが、八橋の彼方に見え透くばかりとなる頃、近侍の士戸の口に來りて、御前樣へ申上げます。何事ぞと問へば。只今千種有文卿御入來ありて、直々御目通りいたしたしと申さる。御通し申してよろしきやと云ふを、肥後守はうち頷き。よし〳〵苦しく無い、此方へ通せと宣へば、有文卿は案內につれて、座に徐々と登り給ひぬ。





肥後守は襟を正して膝押進め、徒然の折から、能くぞ參られたり、いざ此方へ進ませ給へ、今宵は緩々御談話仕るべきか、近頃興ある物語も御座無きや、拙者はたゞ忙しうて、好きな繪をさへ見ることが出來ませぬ、殿上方は拙者共より比ぶれど、まことに物靜かな事で御座らうと云へど、有文朝臣は微笑ませ給ひ。

イヤ〳〵、其儀ならバ拙者等とても同じことで御座る、去年將軍家御上洛後は、殿中も何彼と忙しき事のみあつて、大宮人は櫻騶してなど申したのは、延喜の帝の頃でもありしか、アハヽヽヽ、時に兼ても御話し申置きたる池旭と申する女畫師は、拙者方の出入の者、父の代から贔負にいたして遣りまするが、御貴殿にも御意得たいつもり、なんと引立てゝやつては下されぬか、拙者より別て御賴み申しますると、頻り合ふは名士と勇將、肥後守膝を叩いて。それはまことに面白し、拙者も一日閑を偸み、その池旭とやらに繪を作らして見やう、有文殿、その畫師を近日折を見て招くべけれど、屹度參る樣申付け下さるべし、あア今宵は月のあるべき夜なるに、未だ十六夜の影も見えぬかと、伸上りて庭前を眺むれど、築山の陰にさし昇る明月、皎皎として池の水を照すに、肥後守も千種卿も共に椽頬に立出でゝ、酒酌み交はし給

ひけり。

文林

山寺暮秋　近衛忠熈

足曳のとはやまでらのかねの音も
あきの別れをつぐるとぞ聞く

毛利元徳

さびしさの限りなりけりやま寺の
秋のわかれのいりあひのかね

曉雁　東久世通禧

さやかにもわかつきがたに來鳴也
あきも夜寒のころのかりがね

山寺暮秋　鍋島直大

やまでらの紅葉の陰に來て見れば
吹く風さむくあきぞくれ行く

高崎正風

暮てゆく秋をおくるに似たるかな
とはやまでらのいりあひの鐘

前田利嗣

あきもはや暮ぬとつぐる入あひの
鐘の音さびしみねのふるでら

暮秋紅葉　諏訪忠元

秋もいまとまらぬ水のたつたがは
きしの紅葉のちらでこそゆけ

山寺暮秋　宮地嚴夫

やま寺は霧にかくれていりあひの
鐘の音とほくあきぞくれゆく

中島 宣門

紅葉

かけしつく木々の時雨に岩ふちの
みどりもかはる秋のいろかな

小出 粲

山寺暮秋

わがたなの菊も紅葉もうつろひて
虫の音さむし小野のやまでら

坂 正臣

やまでらの軒端の紅葉ちる見れど
秋はこゝにもとまらざりけり

植松 有經

足びきのとほやま寺のかねのおとの
をはるや秋のわかれなるらん

谷 勤

山寺のもみぢ見がてらまゐてこし
ひとかげ絶えて秋くれんとす

内藤 存守

やまでらの佛ばかりはくれて行く
秋のあはれを知らぬがはなる

上地 信光

社頭紅葉

神垣におのづからなるみてぐらは
あきのもみぢのてる妙にして

三浦 千春

翫菊延齢

菊のはなかざせむ老もかくれけり
のぶらんよはひ限り知らずも

佐々 豐水

原宗右衛門元辰の母

ともし火の赤穂の里にかゞやきぬ

いのちにかへし赤きこゝろを

夕鹿　草野　隆道

夕されバ妻こふ野邊もまよひ來て
わがいほちかく男鹿なくらん

禁中菊　千日　亮

天津日のかげと共にもにほふらん
くもゐの庭のしらぎくのはな

名所紅葉　遠山　操

落たぎつ瀧のしぶきや染めつらん
もみぢしにけり那智のたか山

時雨　勝家　貞艮

はるゝかと見れバ曇りつ定めなき
世のさま見せてふる時雨かな

山寺暮秋　鍋島　榮子

秋ふかき紅葉のかげにやまでらの
いりあひの鐘を今日もきく哉

大河内鉦子

もみぢ葉もはや散りはてぬ秋更て
此の山でらをたれか問ふべき

柳原　愛子

軒にはふ蔦のもみぢ葉かつちりて
あきも暮行くみねのふるでら

小池　道子

いりあひの鐘のひゞきにやま寺の
木の葉みだれて秋ぞくれゆく

松平　健子

山寺のあかゐにうつるかきの實の
のこりすくなになれる秋かな

遠山紅葉　三輪田眞佐子

ゆふつくひ遠山の端にかゝやきて
松の木の間のもみぢいろ添ふ

暮秋虫　諏訪晴子

なきよわる虫のよはひに引れてや
秋のゆくへもまたいかにせん

山紅葉　安東菊子

松むかりまれに殘りてあしびきの
やまはおほかた紅葉なりけり

浦眺望　小川昌子

うち霞む富士の高根をかへり見て
田子のうらふね漕ぐは誰子ぞ

閑庭菊　師岡須賀子

おとづるゝ人なき宿はしらぎくの
千代をひとりにしめて見る哉

松井たまみ

古關秋風

守る人もいまはなき世とおき風も
うしろやすくや關路こゆらん

友をしぬびてよめる歌并短歌

海上壽子

磯のかみ古きむかしも　あづさ弓今のをつゝも
變らずて戀とふものは　こも枕たかきいやしき
中垣のへだてもおかず　妹とせの中ばかりかは
男とちかたらひかはし　女とちおもひおもはれ
ま心をつくすなりけり　君とあれと睦魂あへや
川浪のゆくすゑかけて　友垣とちぎりしものを
くもゐなすとほき境に　ゆくりなく君行坐せむ

後れゐてわれは術なし　稀にだに遇ふ由をなみ
晝はも日のくるゝまで　夜はも夜のあくるまで
うつら〳〵我戀らくを　君知るらめや

短歌

戀ひわぶる心やゆきてかへりぬる　そなたの山のくものひとむら

松の雫　　千稲子

其一　藤島（承前）

沸き來る涙やうやくに　衣のそでにつゝみつゝ
力もなげに身を起こし　はゝの嘆に目覺まして
泣くなよ我が子慰めつ　また眠り行く其の顔に
思はず散らす一志づく　我夫此世にまし〳〵て
見給ふ事のありもせば　如何に嬉しと思すらん
愛らしとこそ思すらめ　やよ清君よ聞きたまへ
幼ごゝろにわきまへよ　御身の家はむかしより
流たゞしきみなもとの　筋目を汲で世々〳〵に
武きいさをを殘し來て　御身のちゝも祖父上の
御心つぎてをゝし〳〵　北風あらく吹きすさび
吉野の山のはなざくら　散りも行かなん此頃の
世の有様をあさに日に　嘆きゐましてけに夕に
立てし雄心ひとすぢに　歸らじものと我が君の
新田の朝臣に從ひて　鎌倉やまのゆふあめに
兵庫のうらのなみ風に　ところ〴〵の戰に
盡くせぬ譽世のひとの　語り傳へてかぐはしく
拙き身にもうれしさの　つゝみかねたる數々を
語明かしてありけるが　早くも雁はかへり來て
紅葉散り行くこの頃に　新田の朝臣は　大君の

勅のまに〳〵北の邊に　まつろひ仕へぬ儕をむ
事むけなさん其の爲に　下り給ふと聞きしより
御身の父もろともに　馴れし故郷あとにして
出で立たしたる其時に　別れまつりし其の時に
我が身を近く呼寄せて　我が此度のいでたちは
生命は素よりなき者と　思ひ定めてあるなれバ
我がなき跡はかにかくに　心のまゝにはかりてよ
君の御爲にすてん身は　いかで嘆かん悲しまん
涙はらつてのたまひし　其の言の葉は今もなほ
みことのこりて一時も　忘るゝひまはあらぬ也
鎧を着けて太刀佩きて　弓矢手挾みたゝしたる
其の御樣はいまもなほ　目さき離れで纏ふなり
衣をかほにおしあてゝ　聲漏らさじと思へども
聲を立てじと忍べども　堰き來る涙絶え間なく
思はず咽ぶそでのつゆ　如何に哀と聞くならん
つきをかすめて鵲の　二聲三こゑなのるなり
やがて月日は移れども　音信とてはあらざりき
稻穗色づくあきの田に　鳴くなる雁の其の聲に
寒身にしむふゆの日に　妻戸を叩くこがらしに
北の地のみの忍バれて　朝夕忘るゝひまもなし
やがて思にたへかねて　心ぼそくもたゞひとり
知らぬ旅路に迷ひ出で　道なき野らを踏分けて
家なき山道ゆきのぼり　漸 聞けむわがつまは
足羽の邊にましますと　此の頃此の地に辿着き
嬉しと思ふひまもなく　此の藤島のたゝかひに
新田の君にしたがひて　草葉にむすぶ白つゆと
消行き給ひし傷はしさ　賴みし綱も切れはてゝ
流にさまよふすて小舟　波のまに〳〵右ひだり

いつかは着かん岸邊に　やよ清若よ聞きねかし
やがて雄々敷生立ちて　父の御心うけつぎて
母か言の葉ゑりきざみ　我が大君のおんために
眞心たてゝふるへかし　云ひつゝ寢顔打ち守り
あはれ悲しや其の笑顔　如何なる夢や結ぶらん
夢にや父に逢ひつらん　言ふべき事も切々に
またも降りくる一時雨　膝に亂るゝおとたかし
やうやく心取りなほし　涙ぬぐひて見上ぐれど
梢にかせのおとすみて　山ぎはちかく月かげの
光うすくもきえがちの　星の影のみさえ／＼て
何處の空にやまよふらん　雁とほくきこゆなり
立ちまよふ胸の雲ぎりはれまなく
つゝみかねたる袖のむらさめ

團子坂の菊

師岡須賀子

團子坂を、菊の名所なりとは、かねて聞及びぬるも、未だ一度も見し事あらざりき。今日しも、谷中なる先祖の奧城に參でし歸るさ、訪ふ人ありて、三崎町といふ處まで行きつるに、その坂の上、やがて、それなりけり。いろ／＼のはたのぼり樣のもの、數多くたてゝ、客人を呼び入れ、狹き坂路を上り下りするさま、聞きしにもまさりて、いと賑々し。とあるところに入りて見れど、菊の花もて、辨慶の、安宅の關こえむとする處と、曾我の兄弟の、箱根山の處とを造りたるあり。そのさま、いと／＼巧なり。されど、おのれは、そのたくみよりも、なほ、いひしらぬ花のにほひの愛度に、立さり難かるに、後にて、高らかに物語らふをき

けど、何某の辨慶は、よく出來たり。それの曾我の兄弟は、面白かりき。眉のほど、口のあたり、人形とは、思はれず。さながら、まのあたり、その人を見る心地すなど、俳優とかいふものゝ品さだめするなりけり。かへり見れど、束髮せる女學生といふらんやうの人二人なりけり。そのいふことのうたてさ、きくに之堪へで、立いでんとするほど、十二三ばかりの少女、祖母とおぼしきが手をとりて、父と共に入り來りぬ。祖母をよきほどにすゑて、あれ見給へ。辨慶ぬしの、安宅の關越ゆる時の苦しさ、いかばかりなりけむ。前より、後より、かくせめられなば、大方のものならんには、躊もし、怖もせむを、君を思ふ眞心には、嚴しき關守もえとゞめあへざりき。と昨日、學校にて、師の君の仰せられつ。さにや、父君と。問ひたるさまの、いはん方なく、らうたきに、打まもり居たるに、柏子木の音して、これめぐりて、また、曾我のところとなりぬ。あはれ、見る人によりて、かくも、さま〲にことなるものか。こ度の、曾我の評やいかならん。聞かまほしかれど、あまりに時移りぬれど、たちいでつれど、その處女のすがたにはひ、今、なほ忘れがたうなむ。

雨中のすさび

竹園

降りつゞく雨に、まだしき人のおとづれもたえはてゝ、いぶせき庵のうちに、たゞ、ひとり、こもりて、昔今の文ども、ひきさがし、日をおくる

を、身のわざになむしたりける。夜にいりぬれど、雨の音も、ことにさびしくおぼえて、まくらにつけど、いねもやらず、こしかた、行末の事ども、おもひつゞけて、

さまぐ\に思ひみだれて八重雲の
はれぬこゝろのやる方ぞなき

更行くまゝに、燈のかげも、かすかにて、いと、ものあはれなるに、雁のなきければ、

物おもふねさめの床をとひがほに
なきてぞわたる夜はの雁がね

かく思ひいづるまゝを、まくらべの筆とりて、かいしるしぬ。

雜報

●慈悲は、人たるものに、特に、婦人たるものに、必無かるべからざる性情の一なり。人にして、慈悲の心なからんか、いかに學才ありとも、いかに藝能ありとも、いさゝかも稱むるに足らざるなり。もし、賢にして、慈悲の心なくば、鄙吝陋劣の譏を招くに至らん。はた愚にして、慈悲の心なくば、殘忍刻薄の行あるに至らん。あに恐るべからずや。げに、婦人の千行萬爲、瞬間も、慈悲の心に遠ざかるべからず。あはれ、世の淑女令孃、つとめて、慈悲の性情を養長して、以て、萬

に推し及ぼし、婦人が慈悲か。慈悲が婦人か。世の人をして、判別に苦しましめ給へ。世の人は、かゝる苦を受くるを厭はざるなり。古歌に曰はく、『誰もまた、わが身をつみて、思ふべし。命はをしき、ものと知らずや。』

●婦人の能否　は、今見ることを得べし。その理由、いかにとならば、出でゝ、世の中を見たまひね。常に、口のみきゝて、手のきかざる婦人は、その忙はしきさま、たとへんに物なし。亦かも、その親、その夫、その兒、はた、其のはらからは、垢つけるもの、薄らかなるものを纏ひてあり。之に反して、かねて、心構よろしき婦人はいかに。忙はしきさま見えず、いさゝかも、常に異なるところなし。亦かも、一家のこらず、暖に着、きよらに裝へり。こゝをもて、婦人の能否は、今見ることを得べし。あなかしこ。

●支那風俗の壞亂　支那は、禮儀の邦なりなどいひたりしも、其の實、久しき以前より、風俗亂れて、いふべからざるものあること、よく、人の知るところなり。近着の支那新聞を見るに、上海にて、このたび、縣令、新に、令を下して、居留地に於ける臺基といふものを嚴禁したることを載せたり。抑、この臺基といふものは、良家の婦女たるもの、青年子弟と共に、此に至り、名を敗り、節を失することを顧みざるところにして、英、佛、米の三居留地内、千軒以上に及ぶべしとのことなり。居留地は、固より、人家稠密なれど、不良の徒、この間に伏在するもの、又、數を知るべから

ずと雖、この臺基といふものに至りては、また、已に、太甚しからずや。去かれども、之が業をなすものと、この家を借りて、醜怪のことをなすものと、みな、容易に、捕捉すべからず。これ、大に、其の掃清に苦しむところなりといふ。故に、今日に至りては、縉紳の子、富豪の家と雖、亦、此の間に出入するもの、頗多く、其の風俗の敗れたること、以て知るべしとなり。

夫、遠き支那のことは、固より、我に於いて、關係なきのみならず、彼は、腥膻の外夷、我が君子國と、始より、徳、智、霄壤の差ありと雖、又、翻りて、我が邦の現況を顧みむ如何。果して、かれ外夷に對して、君子國と稱し、いさゝかも恥づるところなきか。吾人、實に、痛嘆に堪へざるものあり。夫、國の品位は、道徳力の如何に在り。而して、人の道徳の程度は、實に、男子が、女子を待遇する程度に伴ふものにして、女子は、男子の翫弄物に過ぎずなど思へる時代の人々は、男子自身も、亦、一種の翫弄物たる價値より外、之あらざりしなり。男子が、社會に於ける地位の、女子より高き間は、敗徳者を出だすは、男子、之をせしむるといふも、誣言にあらざるべし。されバ、男子たるもの、其の、自巳を持すること、壯嚴、且、高雅なるに隨ひて、女子を待遇することも、亦、壯嚴、且、高雅なるべけれバ、男子の道徳力の進むに從ひ、女子の賤業者の如きを減ずべしと雖、又、女子たるものも、單に、男子の進歩にのみ、依頼せずして、自巳を持するこ

と、高尙なるべく、隨ひて、其の良人、及、世の一般の男子を待つことも高尙なるべく、又、力の及ぶ限は、周圍の女子を敎導し、或は、人道を說き、或は、工藝を敎へ、其の貴賤老弱に從ひ、之をして、適宜に、其の身を守り、其の道を守らしめ、以て、彼の賤業者の如きものを廢滅せしむるに至るを期すべきなり。支那風俗の亂れたるに感ずるところありて、敢て一言するものぞ。

十二月兼題

五日
歌……雪中早梅
文……披書思昔

廿日
歌……老少惜年
文……松不改色

よしやあしとて　きりすてられし
くれたけも　もとにひとよは
あるものや
よしやあしとて　はきすてられし
にはくさも　もとしのぶとて
あるものを

（和田酒盛草子）

餘芳

みちのつと（つゞき）

小池道子

所の産物ども、御覽ぜさせたるを、其の儘、連ね置かせ給ひて、宮にも見せ參らせ給へり。かく、おほむ暇座しまさぬ中に、民のなりはひを勵まし給へるおほむいつくしみこそ、有り難けれ。

五日、雨。曉に起き出でゝ、

旅ぞとも知らで眠りぬ御車の止まる所や都なるらむ」。十時の御發車と定まりたれバ、御先に立出づ。停車場には、送り奉れる人、夥しけれど、車に乘りて待ちたい奉る。いかなる事のたがひ目にか有りけむ、午時過ぎて、立たせ給ふ可き事と成りぬと承る。御調度やうの物も、早う出だし遣りぬれバ、いかにおはし座すらむと、安き心無し。程無く、人の、とよめく音するは、何事と問ふに、今、渡り座しますなりといふに、車よりおりむと爲れど、いな、然らずといふ。から、間近き所にてだに、事の違ひ目は有る世なりけり。

車にて待つだに有るを都人行幸遅しといかにわぶらむ」。午時過ぎて、渡らせ給ひぬ。時の間も、三日、四日、過ぎたらむ心ちして、迎へ奉れる嬉しさ、限り無し。親王たちを始め、軍人、あまた立ち並びて送り奉れる、殿に尊し。今日は、車の内に、よう、案内する人有れど、いかにせむ、雨、打ちしぶきて、玻璃の窓も、曇り果てたり。木曾川の渡、こゝならむ。伊吹山も、此のわたりより見ゆらむなどいへど、かひ無し。米原にて、御前に參りぬ。近江の海、末霞み果てゝ、淋しき雨の景色なり。三上山、鏡山も、雲深ければ、明亮ならず。あたら、名所を、見ずして過ぎ行く口惜しさ、いはむ方無し。とかくする程に、あけの鳥居見ゆ。伏見の稲荷なるべし。七條には、山階宮を始め、人々、迎へ奉る。内迄の道、人の絶え間、聊も無し。南門より、紫宸殿の階を昇らせ給へる御うしろに候ふ心ち、譬へむ方無し。高う、かう〴〵しき御しつらひども、昔懐かしう、打仰がるゝに、況して、住ませ給ひし世を、おぼし出でさせ給ふ事、多かるべし。御先に着きたる女官は、ゑみの眉、開けて見ゆ。御學問所にて、供奉の人々の、御悦び奏するを受けさせ給ひて、常のおましに渡らせ給へり。此の日頃、所狹き所に座しまして、いみじき雨をも厭はせ

給はず、野に、山に、御馬を馳せさせ給ひしおはん勞れも、いと憩はせ給ふらむと、いと懐し。

六日、朝、晴。例の時に、御格子明く、勞れさせ給ひたる大御氣色もおはし座さで、出でさせ給へり。宮も、いと、麗はしき御氣色なり。大前わたり、暇有る程に、高倉典侍、柳原權典侍と、御庭に出でたるに、侍從たち、何事をか掟て給ふらむ。下司に、物のたまへり。堀川侍從、案内爲給ひて、こゝらのおましを見奉る。先、小御所の御しつらひ、あてに愛でたう、御さうじには、名所の四季の繪を書かせ給ひて、讃は、先帝の御製を始め奉り、あこたち、公卿たちの歌を、色紙に、麗はしう書成し給へり。淸涼殿の郞には、年中行事の御衝立たてり。鳴る板を踏みて、おましに入る。御帳臺も、さながら、居ゑ置かせ給へり。櫛形の窓などの雅なる、いはむは、中々なり。御苑には、吳竹、苦竹、綠に立榮ゑたり。朝餉の間、よるのおとど、弘徽殿の造りさま、あてに、愛でたき事、限り無し。紫宸殿に入れば、知らぬ夜の節會など、面影に見ゆる心らし。左近の櫻、盛りに咲き匂ひたり。

君待ちて盛りに成りし九重の御階の花は心有りけり。」今日は、空も晴れぬ。嵐

山の花、まだ散り果てぬ由なれば、行きて見よと、宮の免るさせ給へる、嬉しき事、限り無し。二時過る頃より、柳原權典侍、北島權掌侍、吉田權命婦と、我と、ひとつ馬車に乘りて出づ。道の程、田舍の景色、えもいはず、面白し。蕪菁の花、麥生、緑、限り無く續きたる。誠に、心行く道なり。彼方に見ゆるが、御室なり。此方に見ゆるが、東寺なりなど、案内人いふ。嵐山の花は、殘り少く成りぬれど、大方の景色、聞きしに勝りて面白し。何がしの樓に、暫憩ひて見る程に、

疾く行きて疾く歸らむと思ひしも忘られ果てゝ花を見るかな。」

大前わたり、人少なゝるに、心遣ひして、出でたれぞなりけり。舟にて見たらむには、いかにをかしからむと、口々にいふ。暮れぬ先に歸り參らむと、立ちながら、せめて、岸近くだに行きて見むやと、あゆみかけたるに、衣服などの珍らしきにや、人、打集ひて、行先さへ見えず。宮の屬、いたく制すれども、聞入るべうも無し。爲む方無くて、車に乘りぬ。

嵐山花見る友と思ひしは花を隔つる友にぞ有りける。」

敎の庭

十一月二十日兼題　春日局

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　府下本郷區駒込淺香町　落合みさを

若柳のかげともなりてかすが野に
あらしふせぎし姫小まつかな

地　府下本郷區湯島新花町　花岡うめ子

若草をおほふかすがのひめこまつ
たかきみさをはあらはれに鳧

人　府下本郷區湯島新花町　相羽政子

春日野にむかし盛りしふぢばかま
かれての後も香にはほふなり

石井かめ子

君をおもふ其のまごゝろは位やま
のぼりて高く世に聞こえけり

石井德子

君が爲つくすまことのあらはれて
くもゐに高くたちのぼりけん

伊藤海子

たまの緒を神に捧げてちかひしも
君に盡くせるまことなるらん

靑木春子

君が爲たてしいさをは名におへる
かすがの岡にのこりこそすれ

佐々有鄰子

春日野の藤のゆかりのかげなくば
ちよの竹の子生ひもたゝまし

小橋幸子

眞ごゝろはおきふしことに育みし
たけのみどりの末に見えけり

高井米子

春日野の姫まつかげをわけ見れば
かをりゆかしき花もありけり

上野兼子

生ひ立ちし竹のみどりの末にこそ
はるの日影のにほふなりけん

土生淸子

君が爲つくすまことのほど見えて

わふひの露ぞそでにかゝれる

竹千代の八千代を神に契り置きし　河野　文子
なもかぐはしき姥ざくらかな

君が爲つくすまことのあらはれて　江馬　信子
のどけに見ゆる春の日のかげ

緋のはかまさもあらばあれ麗しき　千々渡橋子
こゝろの色ぞ世にはにほひぬる

若竹をおほしたてたるたをやめは　片岡　光子
ちよよろづよに名を殘しけり

君がためこゝろつくして春の日の　永井さい子
ながくも御代に榮えけるかな

若草ははるの日かげをたのみにて　羽田三緒子
しげりにけりな武藏野のはら

若草の千代田のしろにしげりしは　羽田たか子
はるの日影のめぐみなりけり

土かひしいさをの遂にあらはれて　南大路正子
あふひは園に生ひしげりけり

春の日のめぐみの露のかゝらずバ　南大路芳枝
そのゝ若たけのびざらましを

呉竹の千代のさかえもみなきみが　野尻　僴子
こゝろつくしのいさを也けり

春の日のめぐみなりけりわか松の　碓井和歌子
ちよ田の庭にひとりしげるは

君が世のつゝかなかれと祈りてぞ　碓井　武子
のちの世迄も名は聞こえける

諸人のまごゝろてらすかゝみかな　碓井　武子
身をも惜まずつくすまことは

千早振かみのみまへに千代かけて　山本　澄江
まつのさかえをいのる君かな

二葉より君がつくしゝまごゝろに　植木　鋼子
あふひの影のたのもしきかな

呉竹につもりしゆきもとけにけり　大亦　隆子
のぼる朝日のかげのめぐみに

たらちねの母も及バぬこゝろもて　島田　悦子
おほしたてたる千代のわか竹

身にあまる情のつゆのふかけれバ　山田より子
うるほふ君もひしげりなりけり

徳川のきよきながれもきみなくバ　吉田　芳子

そのみな元は枯れましものを

葉ぞなきみがひかりのてりそひて
よゝたぐひなき色にもある哉　宇野さく子

さかしめが功なりけりたけ千代の
ちよ田の奥にしげりしげるは　宮坂しん子

若竹をかせにあてじとさゝへけん
きみがいさをはたふとかり鳧　坂口たけ子

後の世のかゝみとてらす春の日の
ひかりは常にのどけかりけり　安藤よね子

入るものを黄金の龍と見しゆめは
み國をてらすひじりなりけり　小林てい子

土かひし君かまごゝろあらはれて
庭のわかたけ生ひしげりけん　坂口しん子

位やまのぼれるみねのまつかげに
ちよの根ざしを固めけるかな　土屋てい子

君が爲たてしいさをのあらはれて
よにたぐひなき春日やまかな　高橋まさ子

身にかへて祈るこゝろを千早ぶる
かみもあはれと思ほしにけん　山田さき子

君がためつくすまことは春日なる
やまより高きいさをなりけり　藤澤もと子

立ちよりてわれも宿らんかすか山
かをりゆかしき花のしたかげ　久保田律子

若竹のあやふきふしをすくひたる
いさをは世々にいちじるき哉　横山きみ子

若竹の千代をぞかみにいのりける
いさをは長くあらはれにけり　廣田とめ子

まぞゆしとひとのたゆたふ東を
さしてや君がいでたちにけん　師岡ちよ子

呉竹の千代のさかえはなからまし
いすゞの宮のいのりあらずぞ　師岡きよ子

身をすてゝ君を祈りしまごゝろに
もかさの神もたゝざりにけむ　師岡　米子

我が身をバ君にさゝげて祈りけん
こゝろの光世々にさやけし　太田　象子

春日山あふげバたかくてるつきは
むかしおぼゆる君がおもかげ　藤野たけ子

紅ににほふかすがのひめゆりハ　加藤きみ子

を花にまさるはえぞ見えける

音高しいなばのやまのひめこまつ　工藤まさ子
かぜにはわらで其の名也けり

八千草のかれてわとなき春日野に　大崎よね子
みさをはたかしをかのひめ松

春日野の若むらさきのいろよりも　黒岩六郎子
ふかきは君がこゝろなりけり

春日野の色のなかなるひめわざみ　白岩わい子
を花にまさるにほひこそわれ

春日野に千草八千草はなはわれど　加藤とせ子
つぼすみれこそ匂ひのこるれ

春日なる常磐のいろのひめまつは　平澤とよゑ
を花にまさる匂ひなりけり

春日野にくれなゐにほふ姫百合は　平井ふゆゑ
を花にまさる名をぞとゞめし

春日なる千草のたへに玄げりたる　三田村鶴子
を花にましてにほふ姫百合

色なくてにほふ春日のつぼすみれ　馬場とく子
を花にまさる色こそのこるれ

徳川のつきずながれしみなかみは　春部まさ子
いなばが露の玄づくなりけり

春日野ににほひを殘すつぼすみれ　鈴木てい子
よをふるまゝに玄るけかり鬼

香をとめし春日の野邊の藤むかま　水谷　清子
まづこゝのへに匂ひそめけり

身にかへてつくすまことは位やま　宇多田揚子
のぼりて後ぞたふとかりける

若竹のすゑの世までもかゝりけり　川口とは子
かすがの岡のひめまつのつゆ

生ひたちし千代田のにはの若竹は　中村外千代
はるの日影のわれむなりけり

むさしのに根ざし堅めし葵むも　本田せき子
君なかりせばちりやしにけん

十一月廿日兼題

雪の朝友を訪ふ

天　大坂市東區北新町一丁目　土屋てい子

雪のふり積れる朝のけしきはいめざましき物はな

し梢のはなのにはひうつくしきにまさるともおとらじけさしもめづらかにつもりたる雪はえもいはれず野も山もみな白妙になりはてゝ雪より外のいろもなきかなとは古き人のよまれしなり其わりさまをまのあたりみるゝいとうれし此雪をひとりみんよりは心あへる友とちうちかたらひしめやかにみばやとおもひさへつもりて相知れる人の柴の戸たゝきておとなひ侍ればあるじいとよろこばしげにうちはゝゑみつゝたづねきて道わけわぶる人もあらじいくへもつもれ庭の白雪と寂然法師の詠まれしを今やおもひ出して誰ぞ入り來まさぬことかはとなげき居りし所なりとてまづ庭のおもをみたまへかししらゆふかけたる賢木葉も冬でもりせる櫻木もはなとみるまでふりつもれるをなほけぬがうへに又もふりしけとたがひにいひのゝしりてへだてなき友垣のむつひあへるこそこよなきたのしみなれあなうれしの雪のあしたや

地

千葉縣佐倉町宮小路　植木鋼子

初みゆき降らばと契りし物を此あさけいかで仇に

や過さんと訪れぬ庭に我跡つけて出るもをかしく友許馴たる道も一夜の間にこゝやいづこと分詫るまで降しけるけしき得もいはず辛うじて着ぬればいたくも待つけ侍るを進へ給はぬ嬉しさよ道の程は如何におはせし抔まめ／＼しう一間なる所に木のめなど賛つゝ物せられぬやがて端近く立出ればゆたけく登る朝日の影遠山の端の雪に映じてまばゆきまで花やぎたる池の汀にはいさましき羽音して立水鳥軒近く倒れふしたる呉竹のやう／＼一本二本おき返るもけう有様におはねてかたりつ詠めつ時のうつるもしらぬ間にいつしか午の時斗にはなりぬかくて猶有なば我家の庭は主なきひまよあたら消やはてなんといとをしうしのばるゝまゝにあかぬ幽居をも辭して歸りぬ

人

府下芝區三田四國町　師岡千代子

今朝の雪いかにか見給ふらん今しも伊勢物語を共によみ給ひし小野の令孃のもとよりむつきならずも雪ふらばとはんと契り給へるは今朝の事にはべらずやいかで獨はつれ／＼なるを君と共にとくと

くと消息し玉へり實に所せき市まちの中に見んは何はかりのはえもあらしを障もおはせずは今より車を列ね侍らん別業は原橋をわたらぞいと近く言問の岡にもとはからぬ處にはへり君と訪ひたらんにはいかに悦ぞるらむ例の物がたり取出で忘れては夢かとぞ思ふなぞいはるらん時うつり降積るとも車も船もはべれバ泣く〳〵歸る樣の事ははべらじかし御返事まち奉るになむかしこ

佐々有鄰子

いぎたなき朝いを鳥の八聲におどろかされてねやのつま戸をおしあけみれバ夜半の嵐のすゑはれ白銀しきたらんやうなり斷金の友の都の住居いかならんと車のわだちおちまちおもひやられ侍りぬむかひの嶺の雪をぞ玉たれのをすかゝげてもろこし人のむかしをしのび清少納言の心をくみてみますらんあはれ〳〵うるはしきとバの花のにほひもらしたまへきかまほしうなん後刻とはいはずとひ侍らんあなかしこ

碓井 信子

いつの間にふりいだしけん我が所せき庭の面だに今朝のながめのうるはしさゑにも文にもつくしがたう侍るをまして野山のけしきは如何ならんおんさはりおらせられずバいざとく心のゆきをかきわけて我家まで來たまひねかしあなかしこ

碓井 武子

雪のいたう降たる朝ぼらけはをちこちの童らめづらしがりて寒さをもうちわすれさま〳〵の形などつくり遊び四方のけしきはさながら白銀の世界の如く梢は春の花秋の紅葉にも劣るまじきさまされぞ香爐峯のけしきもかくやありけんと今朝は雪にすだれまきあげし昔人を忍びながめ侍るをまして雪深き山里に住みたまふ御許にはさぞや野山のけしきおもしろからめと御浦山しうなん

碓井和可子

夜を寒みとて起きいで見渡せバ庭の面は恰も玉をしきたるやうにうつくしくをちこちの木々は春に知られぬ花咲きいとめづらしうながめ侍るに折し

も吹きしきる風に飛びかふさまこてふの空にむらがりて立まふかとあやまたれこを窓の内に火桶をたのみにてながめんはいとかひなくおぼゆれば隅田川に小舟さし出し四方のけしきみむやと思ひたち侍れど使して侍るをあはれおなじ御心おはさばとて雪かきわけ來給へかしあなかしこ

山本　澄江

雪のいたうふりつもりたるあした友がりとはんとて出で立つ見渡す限り白妙敷きつめたらんやうにてたゞ河水のみぞ青みだちて流るゝけはひは目さむる心地のせらるゝに鴛鴨などのこゝかしこにあそべるさまなどいといはんかたなし許越人のめでたりし山陰の風景もおもひやりつゝけいしもうもるばかりなるをからうじて戴安道ならぬ雪道を行きつきしに門の戸なほ閉ぢたりければ興さめはててやがて歸りなんとせしかどそは外國のをのこのしわざなりたゝかんかさせる事のあるにもあらねばかへりぬ

大亦　隆子

不破の關屋のそれならでいとも年ふりてわづかに雨露のみぞしのぐなる賤が伏屋もけさはいとう景色つきて只玉しきのうてなとなり落葉の庭も枯れし梢も皆見る目わやしうなんかはり出でたるは柳櫻こきまぜて春の錦をよそほひなせる都の家居も何かはと心うれしういざや在五の君ににるべうもあらざめれど雪ふみ分て友をやとはむゆく末の空もひとつてふむさしの原の雪景色げにもたぐ也咲にはふみよしの山のさくら花これは〳〵とむかり詠ぜしときゝし一目千本とやらんのおもふきもかくやとむかり弓なる腰もいとゆるびやかにたどりつきしに門邊の小松色そへて主の君の操もしるき友の家なりけさの景色もまだ得知らでやとうかゞへむかすかに玉琴の色音ぞゆかしうきこえける松風の音にもあらず尋ぬる人の友待ちの曲の雪見琴なりけりとやゝおとなへば八つにもならん乙め子のいとらうたけなるが主の人のまちておはせしとてみちびく高樓はけふのまとゐのむしろなんめり同じ學の友垣みたりよたり宇治の木の芽にるすき人

うた合する風流人皆さま〳〵の遊しつようこそとくよりまちしとより〳〵にいひて立むかふるもげに親しき友のまことなりや埋火の下よまとゐしてしめやかに語り出で眺むる朝のしろがねの景色いゝえずていともめでたくたのしうこそおぼへける

島田　悦子

きのふまで枯野のけしきいと淋しかりしによべは嵐の音のすごきほどにて折々は戸をさへ叩きてあたら夢をばおどろかしけり朝まだきに起きいでゝ見れどこはいかに昨日まで枯れしと見たる木々は皆白妙の花さきあな面白の景色やなひと夜のほどに小庭の松あるは竹の梢より野末の草葉にいたるまでおしなべてしろがねしきたるありさまは雪のけしきのひとり占むる趣とこそ悟りけれ殊に天津み空はさすが清らかに晴れ渡りて遙かに見ゆる富士の高根はさながらよ寫しゑに似たる姿の雄々しさは口をしくもつたなき筆にはのべがたくさりとて獨りながむるもあたらしう思ふまゝいさゝか席をまうけ侍ればきたまひてんやゆかしき言の葉をもらし給はゞいかでかり樂しからむと迎へのもの奉りぬれど道の程はわびしうおはすれどあはれまげてきたまひてよかしこ

山田より子

をりかこふ柴のまがきも山となりて隣をへだて往來の道も跡たえぬいでやかゝるおかしき雪の朝を家にのみ眺めんはむとくなるべし野にや遊ばん山にやうかれんなど打ちすゝろくに例の友どちより「とほしとも今こそ來ませ歌よまむ雪もまつらむ我もまつなり」と云ひおこせたりうれしとも嬉しくてすぐものしつるに主見るよりおもしろき今朝の雪をかへす〳〵も云ひつゞけつゝ出迎ぬ先づ設けのところに至り見渡すに紅葉ちりたる梢どもの春まだで花さきたるまた此面彼面に松の操も埋もれて山かと見るまでに積りたる雪など火桶うちかかみつゝあかぬ心地にめでのゝしる大方月にも花にも友なくてやはと古より云ひおきたれど實にさることになむ

坂口たみ子

雪のをかしくふりたる朝心ある友だちの共にながめくらさんなどいひて文どもをこせたれバ我庭の所せきだにいひ知らぬ景色なるをまして人里はなれたるながめ如何ならんと獨り杖とりてさし出づやがて程なく着きぬれバいたく取なしてとある見はらしよき一間に通しぬ見る限り白銀しきつめたる如く軒に近き冬枯の梢どもに雪のとまれるさまなどえもいはずをかしくて花ならバ一枝折りて家づとにせんものをすべなくてながめ過しぬ

横山きみ子

雪のいたうふりたる朝親しき友許訪はんとて立出づれど銀の眞砂積みたらんやうなる山のいたゞきより紅の旭の影のさし出でたる老松の梢高くふりつもりてくれ竹の葉末ふしたわみたるいとをかしこゝろのあとはつかねども歌ひつゝ學校に通ふ生徒簑うちき笠うちかざして山路を辿る樵夫などいとあはれなりかくていたりつきぬれどあるじのきみははしゐしていかでとひこん友どちもがななどつぶやき給ふ折なりけれどいろり埋火かきおこししとねなどしきそへて請し給ひぬこゝろへだてぬ中らひなりければいとむつまじう打むかひてやんごとなきあたりにて御簾まきあげておほん帝の御こゝろをなぐさめられしみよしの山の奥ふかく入にし人をしたひし操などさても雪はをうなにちなみ深き事よなどむかしのふみのあととめて語りあふまゝに日影の高く上るもしらでありきかくてはとていそぎ家路にかへりて見れど玉しき渡したらんやうなりし庭も消えて跡なきありさまなりき

藤野たけ子

思ひがけなき今朝のみ雪いかに見そなはしたまふらん常はいぶせき伏屋も一夜の程に玉敷の庭をしつらひ木々の梢に時ならぬ花咲せなど雪の朝ぞかりながめをかしきはあらじまして高やかに見はれよく住みなしたまふ御舘のけしきさこそと思ひやり侍るさるを近頃北の國よりかへり來つる人の侍るが此み雪ふみわけてけふなん先つ頃契り置し彼國の物語せんとて來たまへれど今をやみの見ゆるまにとみむかへの車奉りぬ打つけながらかゝる談

はかゝる折にこそ身にしみておもしろき者なれ賤が伏屋は何のふせいも侍らねど火桶だにかき起して待ち奉るをあはれとく〳〵いそがせたまひてよ

加藤きみ子

けふしも朝まだきより雪のいたう降りはじめけれど心ならずも此彼のしわざをなげやりてつれ〴〵をなぐさむるよすがにもと木ずゑに積れる白妙を打見れど風のまに〳〵うち散りて姫小松などは枝もたわむばかりに見る〳〵ふりつもりぬ實に白雪はましろにして詠めも飽かず天然の美色をもちて人の目を喜ばせ眞心をも澄ましむるはげに白雪の德と云ふべしなべて人の天性は此ゆきに異ならずわきて幼き時は白糸のいろ〳〵に染まるが如く習は第二の天性ならんなどはかなき事ども思ひつゞくるにけさしもいかに詠め給ふらん雪の事何とも申聞えされど思さんほどはづかしくてゆかしき御志をもうけたまわりてんとさてこそかくは音づれ奉りしか

黒岩六郎子

山里も都もわかずふりつもりたるけしき白き布しきならべたらん樣にていづこをいづれと見えわかず朝日の柴の編戸迄かゞやきわたり雪おもげなる冬の梢のありさまなどいとうるはしく面白さに心なき身にて見過しがたくおぼゑあと見ぬ庭をふみをしみつゝ常々いそしみむつびかたらふ友の許にいたり窓おしあけ火桶うちかこみまづ今朝の雪は如何にといふをはなしのはじめにて春秋の花紅葉の艶なるをも忘れ前栽の日數ふつゞかなりしときは木も今はさまかはり白雪の中より青葉のいでたるなど松竹のけじめをかしうすみわたりて心のちりもしづまりぬ只いひしらず〳〵といふのみほかに愛づべき言の葉も得しらぬまで打興じ歌などいひ出して樂みぬ實に心のゆく事の限りは此頃のけしきになむ

宇多田揚子

窓の明りに驚されて起き出づれば夜もまだあけやらぬに見渡す限り白雪の降り積りて晝をもあざむくばかりなりさすが其美さに又寐もやられず打眺

むるまゝに夜もやう／＼明けぬれどかゝる景色を獨りのみ眺めんよりもと寒さもいとはず雪ふみ分て親しきある友を訪ひぬあるじもゆくりなき音づれに驚きながら打嬉びていと眺めよき高殿の窓のもとに誘ひぬ折しも朝日うらゝかにさし登りかゞやく影はさながら白銀の世界とも思はれてえもいはれぬ眺にぞあるかの香爐峯のゆかしさに小簾をかゝげて御前の御心をなぐさめしもかゝる時にやありけんなど思ひ出されて共に打語らひつゝ松竹のたゆまぬ操をほめて歌にもよみ文にもつゞりなどいとも快く樂みてなん歸りぬ

野尻　鶴子

宵の程より雲の行かひも只ならず夜半過ぐる頃より一しはさむくおほとの池も氷りやしけむと思ふ心かゝりねられぬまゝ明くるをまちかねいそぎおきて見ればば野も山も一夜にかはる白妙やいづこも只に眞白にて庭の木々も時ならぬ花咲きて兼てはいといぶせかりける賤がふせ屋も仙人の住みけむ瑤の臺と見まがふばかりなり雪月花の時にこそと古の人も云ひけれけふのけしき只やは家に居らるべきあはれ學の友のいかに見るらん獨ながめんもいと心もとなしと思ふまゝあさげさへそこ／＼にあしだに二の字かきつゝ程遠からぬ友の元にたどりぬおかしき景色に寒さもをぼえずいそぎしにかよはき女の足とて幾度かまろひ幾度かころげぬるもあはれ程へて尋ぬる垣根に來ぬれば内に冬ごもる草も木もと打吟じたるいとおかしあはれ主の君も早やたしなみ給ふらむと門の戸ほと／＼とおとなうに主の君いできて此の雪深きにと折よろこばるゝまゝおとなひはし近く火桶引すへて茶などすゝり眺めかたらふに主の君の

あさからぬ心の底は我ぞしる
　とひこし路の雪の深さに

といはれければ

あさからぬ君がまことはふみ分けし
　こし路の雲を幾重かさねむ

と答ねぬる中天の空なごりなう晴れ日影まばゆく童どもの庭に下り立ちて雪まろげなどして戯れ遊ぶにつれて手がひの犬めの立走るなどいとおかしとかうする中日もいたく登りていと暖まるまゝ今はとて互にいふこともまだあきたらざるも家路にかへりぬ

副島伯爵閲
東久世伯爵著

尋常小學修身書　全四册
全　教師用　全四册
高等小學修身書　全四册
全　教師用　全四册
尋常小學國史談　全二册
高等小學國史　全三册
中學國史　全六册

右各府縣撿定審査ニ付必用之
方へは御申込次第贈呈可致候

發兌所

國光社

女鑑第五十號目次

(明治二十四年八月八日內務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿六年十一月十九日印刷
同年同月廿日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人 川崎直衛
同 編輯人 山根勇藏
同 發行所 國光社

(東京國光社印刷部印行)